

日本における統計学の発展

第 53 卷

第 54 卷につづく

話 し 手	木 村	太 郎
	内 海	庫 一 郎
聞 き 手	大 屋	祐 雪
	森 藤	博 美
	佐 藤	博 行
	坂 元	慶



1981年12月12日

法 政 大 学 に て

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀦信邦*、森博美*、山元周行(* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

大屋 それでは先生、すぐ始めましょうか。

木村 パーソナルな方がいいです。ごく簡単にね。

大屋 まことに失礼ですけれども、先生は何年のお生まれでございますか。

木村 大正2年2月22日。

大屋 ご郷里はどこですか。

木村 東京のいまの北区の王子というところですけども、父が軍人だったものですから、父たちは一時新宿に新婚夫婦で住んでたんですけども、私が生まれたときは王子でした。育ったのは、また新宿に帰って、新宿から渋谷を経て、また王子へ帰ってきて住むようになったのが大正5年くらいでしょうか。

大屋 そうしますと、小学校も東京ですか。

木村 小学校は王子で、王子小学校というところへ行きましたけれども、中学校はいまの小石川高校、東京五中というところなんです。そこでは、五中の5年先輩が松川さんですね。それから、一時統計基準部にいられた井上照丸氏、あれも松川氏と一緒に、ぼくの5年先輩。ぼくが9回になるのかな。井上さんが2回ですから、間が7年ありますね。

大屋 五中というのは、経済統計に関係のある先生がずいぶん出られたわけですね。

木村 そういうあれは多くもないんじゃないですか。しかし、ほかに聞いたことはないですよ。わりと社会関係は少ないですね。

大屋 それから第三高等学校ですか。

木村 そうです。京都に親戚がいたりね。まあちよつと三高に当時あこがれていました。父が軍人でした

からどうも家にいると環境がよくない。そういったことから脱却する意味で京都へ行ったんです。

大屋 何か中学時代に思い出みたいなものはございますか。

木村 いろいろありますけれど、これはちょっと、いろいろな面で支障があるんですよ。(笑)

佐藤 三高にお入りになったのは何年ですか。

木村 三高は卒業が12年ですから、入ったのは8年ですか。

大屋 そうすると、三高時代はずいぶんたくさんの思い出があるわけでしょうね。

木村 ええ、やはり一番大きな思い出があります。三高時代は、ぼくもおくれて行った関係があるものですからね。ちょうど三高の学生運動の一種の後退期でして、その中で、ちょっと前に宇高基輔君とかなんかいまして、ぼくらと一緒にになったのは河野 君とか野間宏だとか、織田作がぼくの前からおりてきて一緒になるとか、瓜生忠雄という法政で映画史の研究をやっていた人がいました。富士正晴はぼくと一番仲がよかったんですけど、いまやっぱり一種の小説家で、そんな連中と一緒にいろいろやりました。ちょうど過渡期ですね。

佐藤 滝川事件はどうですか。

木村 ちょっと前です。ですから、三高のときには直接にかかわりはありませんでした。京大の一部の人たちと若干そういう接触はありましたですけどね。

大屋 そのころちょうど日本資本主義発達史講座みたいなのが出ていた最初のころだと思いますけど、そのころまだ、あまりご関心はなかったんですか。

木村 いえ、むしろ中学校時代には東京の学生が中心で三高に行ってから、そういうものに関心を持っている学生が非常に少なかったですね。ですから、そういう意味じゃ、どっちかというところの方がリーダーみたいになってしまいました。河野君あたりと多少議論するようになったですけれども、唯物論研究とか日本経済評論のようなものが高等学校時代の主たる読み物でした。ただ、そのころ内部でいろいろな研究会をやろうと、ほくらも話しかけたりしたことあるんですけど、その段階ではちよつともそういう学生が少なかったですね。その点内海さんは早熟でした。

佐藤 社研は三高にまだあったわけですか。

木村 社研はもうなくなっていた。学校は非常に神経質になっていました。

大屋 三高からは真つすぐ京都大学に進まれたのですか

木村 ええ、ちよつどまた家が京都へ移ったこともありまして、京都大学に真つすぐ行きました。高等学校時代から、京都大学へ行こうというノリの希望は持っていました。特に蜷川先生のところへ行こうと、高等学校時代から決めていたことですからね。しかし統計学やろうなんて気は、そのころあまりなかったですね。むしろ、京都大学経済学部のもっている自由な空気に浸りたいと思っていました。また、高等学校で境川事件のころから多少接触のあった先輩、仲間が皆京都大学へ行ったものですから、そういったこともあって京大に行つたわけですね。

大屋 統計という言葉はいつごろお聞きになりましたか何か記憶がございますか。やっぱり、大学の蜷川先生の講義ででしょうか。

木村 正直いって、蜷川先生のところへ漢習に入ろうという気はあったですけど、むしろ統計そのものには関心はありませんでした。その前にやっぱり学生のつながりがありまして、そこで上杉君とか大橋君とか、ほかにもいろいろな方がいうっしやったですけど、そのころある程度高等学校時代に何らかの傷を受けておくれた人ばかりが来ていたわけです。ですから、普通の学生かう見ると、ややみんな年寄りがそのころ集まっていたということですね。その連中は話も合うし、そういった学生仲間では何とか組織をつくろうというような動きもありましたし、私なんかは少しずっはまり込んでいくわけですけどね。

そういう雰囲気の中で、むしろ上杉君とか大橋君なんか、ほかにもいろいろありますけれども、統計学ということと一緒にたんじゃないんです。そのころ学生のいろいろな研究会が盗人にありまして、非合法的に集まらないと何もできないものですから、各研究会のリーダーが、夜どこかにひそかに俳句の会とか、あるいは酒を飲む会とかいう名目で集まっているんですね。やはり戦争の流れをある程度嘆いたり、多少積極的にどう取り組もうかというようなことを漠然と話したり、しかもひそかに会わなきゃならないという状況だったですから、非常に仲よくなったわけですね。と同時に、その学生の中で古い傷のある者が多いものですから、ほくらの段階で古傷のある者はそういう学生の組織の中に入れると危険だということで、上杉君なんか大傷があるし、大橋なんかも傷があるし、できるだけ棚上げして、むしろ警察の手が入らない形でしようという動きが一時ありました。

そういう形で、表面的には若い人たちで、その当時、一種の学生研究会——これは音楽関係から美術関係から、一時非常に大きくなっていました。京大には何かあるんだろうという程度で進んだわけです。

私は昭和15年に卒業して満鉄に行きました。学校にその組織ができたとき、16年から京大の学生の検挙がありました。ちょうどぼくが入学するので、昭和16年2月に蜷川先生にお別れに行って、帰って、伊勢にいる友達のところへ行ったら、友だちが第1回目に挙げられたので、これは大変だとにかく早く入学した方がいいなということで入学したわけです。その後、あれほど大規模じゃないけれども、四十何名挙げられたですね。しかし、実際上何もなかったわけです。それで警察ではかなりいい待遇で、すき焼きなんか食わしてくれたりそうだけれども、結局3〜4ヵ月とめられた。

そのときに上杉君も大橋君も、こういうことをいっていいかどうかわからぬけれども、またもう一度みんな引っ張り直されるわけですね。ぼくのところも、兵隊に行ってからそういう警察の方からの連絡があったんだそうです。ぼくは連隊長から呼ばれましたけれども、きっぱり断った。そうだった状況で、それは何もなかったわけですね。あれは木村のせいだといわれているところもあるんですよ。

大屋 蜷川先生のゼミナールというのは何年ぐらいにご参加されたんですか。

木村 あれは入った翌年ですから、13年からですね。入って、上杉君が1級上にいまして、ぼくと一緒だったのが大橋君でした。

当時、蜷川先生のところでは、助手大学院生が置けなくなっているんです。できるだけ戦争に拠出するということになってまして、置くとすぐ前歴があるとか何とかいうことがいわれる。そういう人ばかり蜷川先生のところに集まる傾向があつたものですから、蜷川先生自体もかなり目をつけられて、かなり神経質になっていたようです。それにはそれなりのわけがあつたんで、そういう人たちは、ほとんど蜷川先生のところにいたし、また蜷川先生くらいしか受け入れてくれなかつたんじゃないですかね。大屋 ゼミのテキストはどんなものをお使いだったんですか。

木村 テキストなんか蜷川先生は全然ないです。ただ、そういう蜷川先生の下に岡部利良氏が東洋経済を辞めてきていました。それから前田勇太郎氏、これは大先輩です。それから馬場吉行氏、内海氏、その次が私とそろそろいるわけですね。テーマというか、読む本は、その先輩連中がみんなどういふことをやっているかということを書いてくれたわけですね。その時にぼくなんかは、前田さんだったんですかね、アルマン・ジュラを一応読めということ、強制的に何か本を押しつけられたんですね。原著で、それを訳してこいというわけですね。

1年がそれで、2年のときは自分で多少テーマをやるということ、ぼくは国富統計をやりました。ちょうど当時、経済評論の寺島一夫が「国民所得と再生産論」という論文を書いた。初め再生産論をやりたいかつたものだから、再生産論を軸にして、寺島氏の仕事を自分なりに組みかえてやってみようなんてこともやりましたですが、結局最後には生産指数論を最後の1年間でやりまし

た。

これはいま覚えていないですけど、覚えているのは、日本にも来ましたバーンズという財政長官の論文と労働価値説を結びつけて生産指数の抽象的な論文を書いた。これもずいぶんでたらめでした。前田さんという、そのとき助手であられた非常に親切な方がおられました。戦死して亡くなりましたけれども、ぼくだけが論文出さない、満鉄へ行って酒ばかり飲んでいるものだから、心配して、「論文出さないんで先生が怒っている」と忠告してくれたわけです。これはおどかしだろうと思うんですけどね。ぼくが横浜から船に乗って神戸へ行くのを横浜まで送ってくださった。そこでぼくは船の中で書き上げて、それを前田さんにお渡しした記憶があります。それほどおあらかだったんじゃないですか。(笑) それからずっと軍隊ですからね。

佐藤 満鉄にはどのくらいおられたんですか。

木村 満鉄の期間といいますと、昭和15年の4月から翌年まで、形としてはいたことになっています。私は長男だというせいもあって非常にぜいたくをいながら蜷川先生にお世話になって、母親1人だもんですから満州には行けないということで、東亜経済調査局という大川周明氏が局長やっていたところへ所属したわけです。しかし、満鉄の社員になるためには、どうしても本社に行かなければいけないということで、出社して5月う10月ごろまで本社に行きまして、それで一応業務構成に入るわけですけども、私が入れられたのは理論班というところ

ころです。

満鉄というのはおもしろいところで、みんなマルクス経済学をやつてないと出世ができないというような風潮が公然とあつて、少し酒を飲んで大きな議論をすると、あいつすごいぞということ引き張られる。私なんかもみんな議論させるんですね、入ってきた若い連中に。

ぼくと法政大学の山内一男と二人が川崎班にいたんですが、理論班として所属されました。何をやったかという、東亜経済の再生産論をやろうということ、その仕事の延長上に戦後の満鉄の戦時経済論という調査になるんですけどね。ぼくら二人とも矢隊に行くかわからないという段階だったですから、本当に基礎理論を、しかも夜になると川崎さんの家へ行きまして、川崎さんものすごく酒が強い人で、酒を出してくれて、「資本論」を前に置いて議論を始めるわけです。初めのうちはこっちもなかなかやっているんですけど、だんだん飲まされてくるほどに向こうの方が理路整然としてくる。(笑) そのうちにわけがわからなくなつてへばつてしまうというような日常の繰り返しで、結局山内君は本社に残つてそれと続けてやるわけですけど、ぼくは10月に一応内地へ引き返して東亜経調査局へ行った。

そこでは、フランス語をやったせいもあつて、イランを担当しました。イランの本をとにかく訳す仕事です。しかし、前にいるのがフランス語の大家ばかりでしたね。ぼくの前が大先輩で古野清人という、一時九大で社会学を教えていたんです。それから大岩誠さんという人、そのくらいしかいなかったですけど、その部屋には小竹豊治がいました。慶応の証券論をやっている人ですね。

また、一緒に満鉄から帰ってきた小山孫次郎という人もいました。これは酒田市長で、一時ぼく国民経済で一緒にいましたけれども、向こうは大家ですし、「木村さんはいぶんゆっくり本を読まれますね」なんて冷やかされたり、(笑)「さすがに慎重ですね」なんていわれて、大体読んだ気もしなかったです。だけど非常に楽しくってそこへちやうど小竹氏と一緒にだったせいもあって、木村権八郎氏とか、浅野晃、ああいう人たちが出入りしていた。みんな大先輩ですけど、「君ら、もうじき戦争へ行くんだから」ということで、非常に楽しくやったですね。

佐藤 イランについては何かテーマがあつたんですか。資源だとか経済だとか。

木村 いや、イランをやれということです。これはまたおもしろいんで、裏話になるけれども、満鉄調査部が、当時大川周明氏がもともとやっていた東亞経済を接收したんですね。満鉄調査部としては、やはり東南アを含めての市場権を自分の調査対象の再編成の枠内に入れたいという意識があるんですけど、大川派がそこにたくさんおられて、昔から仕事をやっているわけです。それがみんなどっちかというとは社会学系統の方でした。占野さんはその1人ですが、経済理論というものはほとんどないんです。

それで満鉄調査部からこっちへ行くとき、ぼくら密命をもらって、やっぱり東亞経済圏の再生産論の調査も中に組み込むようにおまえらやってくれといわれた。こっちも何しろあと半年で兵隊に行くということでそんな気もなく、むしろ来てみたら、当時の情勢からいって大川周明は右翼だけれども、非常に調査マンに対しては

リベラルで、「資本論」なきや買つてやるとか、そういう
もので勉強しなきやいかぬということを用うような、い
わば親分タイプの人でした。ほとんど仕事という仕事は
しないで6ヵ月終わつたですね。イランの本を1冊読ん
だぐらいです。森 内海先生が満州の話をなさるとい
うことで、少しこちらも予備知識を仕込まなきやダメだ
と
思って探したら、こういう本(草柳大蔵著「満鉄調査部
」)があつたんです。中はあまり満鉄調査部の話は書いて
ないんですけど、ただ1ヵ所だけ蜷川先生の話が出てく
るんです。昭和7年に蜷川先生が港灣学の研究に取り組
むということで、研究室を大連に移したという話を書い
てあるんですね。すでにそのころから先生はいろいろな分
野に関心を持っていらっしゃるんですけども、そのあ
たりいかがですか。

木村 やはり1つは蜷川先生のアカデミズムに対する一
種の反抗精神みたいなものがあつたと思うんです。性格
的には先生は、庶民の経済学でなければいかぬというこ
とをしきりにいわれて、「象牙の塔を出でよ」というのが
講義の中の1つのキヤッチフレーズみたいなところがあ
るんです。そういう意味でいろいろな現実的な面への接
近ということに対応されて、ほかの京大のアカデミック
な学者に対してかなり批判的な向きもあつたんです。

そういった一環として、満鉄の方へ弟子とかなり送り
込んでいったということもあるんじゃないかと思うんで
すけど、満鉄調査部の嘱託みたいな形だつたんですね。
と同時に大連市の嘱託でわれわれもそのおかげで満鉄に
就職できたし、上杉君も大連市に行つたんです。ぼくは
積極的な関心というよりは、そのときの情勢の中での1

つの対応の仕方ではなからうかと思います。

大屋 兵隊はどちらに。

木村 満州です。

大屋 何年ぐらいいまで、終戦まで？

木村 初め満州の一番北にあった輸送部隊の主計将官でした。終戦の年の3月に運よく部隊ごと南方へ行く作戦命令が出されました。そこで部隊ごとうまいことにラングムまで出てきたんです。南方といっても恐らくは沖縄だったろうと思います。

そのうちに内地防衛という部隊の方に切りかえられて部隊ごと、たしか3月末に新潟に行って、新潟でさらに命令をもらって、どこに行くかと思ったら、なんといま私が住んでいます浦和のすぐそばの川越というところなんですよ。川越に部隊ごとやってきて、あそこでお寺に全部分宿させて、私は主計ですから、そういったお寺を借りたり、兵隊を分宿させたりして、結局あそこに輸送司令部を置いたんです。

当時、関東の自動車量というのは全部で100台、そのうちのうちの部隊が40台ぐらいありました。結局アメリカが東から上がってくるか、南から上がってくるかわかりませんので、どっちから上がってきてもいいように、あそこを中心にして防衛をしようという非常に無責任な作戦でして、住民は何も知らないんです。こっちは最後には川越まで下がって守ろうという作戦をやって、それなりに市部の方に2段階の陣地もつくろうということで、そういうような時期に川越に来て、そのまま終戦になった

佐藤 内地に帰られたのは何年ごろですか。

木村 20年の3月です。

大屋 そうすると、兵隊から帰られてすぐ国民経済協会ですか。

木村 そうです。ぼくの部隊はそういう自動車部隊だし、応召の平均年齢40歳というようなおじいさんばかりです。だから軍隊らしくない軍隊でした。そのまま居ついてしまうのと、アメリカから命令をもらって、直接アメリカは自分たちでは武器やなんか接收しないですね。自動車部隊としてそれをかわって接收しようということ、アメリカから終戦後釘づけにされて、10月まで部隊解散命令が出ないのです。兵隊さんは帰りたいんだけど、兵隊もそういう40歳の兵隊だから、帰るべき家が東京と名古屋に分かれていまして、ほとんど帰る場所がない。家族がみんな来ているわけです。ですから、兵隊さんといっても点呼のときなんか、奥さんと別れてみんな出てきて、寝るときには奥さんの家へ帰るというような部隊だったんです。

ぼくはしばらく主計の責任でやらなければいけなかったんですけども、満鉄の方も気になったし、満鉄の調査部に行ったらもうてんやわんやでした。それで満鉄調査部と相談して、これからどうするんだということ、ちょうど稲葉孝三という人が調査部をつくって、満鉄調査部と企画院を中心にして研究所をつくって日本の再建計画なり調査をやりたい、おまえ手伝ってもらうわけにいかないかということ、ぼくはすぐ稲葉さんに会った。「すぐ来てくれ」ということで、10月、そのときは私も兵隊は一応無理に隊長に頼んでやめさせてもらうって行っ

たんですけれども、隊長は主計がなくなっちゃ困るから
 というわけで離さないですね。縁を切ってもらって、国
 民経済へ行きました。国民経済ではちょうどそのとき正
 木さん、それから中心になったのは和田博雄さん、何ん
 となくみんなが一緒になっていったんで、大東さん、和
 田博雄さんなんかがいました。

それからおもしろいのは、学校の卒業がだれがだれた
 かわからないわけですよ、終戦後で。いまだと何年卒で
 何歳だということがノツの格付になるけれども、当時ほ
 くなんか頭がはけていたもんですから、わりと上に見ら
 れて、(笑) 毛が生えてれば若いんだ。同こうは「木村さ
 ん」といって、こっちは「おい、君」なんていつたり。
 (笑) 要するにあのころが終戦ですね。和田君なんか、し
 ばらくほくの方が上だと思っていた。

仕事は10月から始まったんですが、10月は準備期間で
 11月から調査をやろう。何をやるかというのと、とにかく
 農林省から初め10万ぐらいの金が出るから、それで再建
 計画の仕事をするということで、稲葉さんが鉄鋼、重工
 業関係と軽工業。何しろ当時は農業が非常にウエートが
 高かったんで、ほくと山田亮三というNHKに行った人
 いま専修に来ている三輪良雄。三輪君と山田君、両方と
 も海軍大尉ですから、当時軍服着ておったですよ。ほく
 は軍服は着てなかったけれど中尉だった。それで農林省
 の中に籍を入れて、企画院でやっていた物動計画に準じ
 た形で経済の第1プランというのをつくったですよ。

20年を基礎にして、どのぐらいの肥料、農薬、労働が
 あればどのぐらいの米ができるか。米を軸にして肥料
 産業の必要量を決めていくとか、肥料、しょうゆ、野菜

などを行いました。それに対する原料輸入量、要するにそのころは産業連関という頭がありませんけれども、それをするのに結局原単位を基礎にして、原単位自体、ほくら矢隊から帰ってきて全然知りませんか。農林省のお役人から、それぞれ物的なデータももらって、それを基礎にしてを行いました。

(内海庫一郎氏、出席)

大屋 そのころ、統計資料はありましたか。

木村 ほとんどない。それでさっきお目につけた「経済統計資料」、こういうことをやり出したのです。そのときに資料はないけれども役所自体はほとんど統計をつくる威力はないです。20年、21年といいますと、それどころじゃないです。われわれ自体が統計を集めて、しかも統計はないっていうけど、当時役所は疎閑してましたから、それが集まってきたとまるんですけれども、あらゆる書類が散乱しているわけです。そういうのをわれわれは取ってきて、山田亮三と二人でいろいろの部署のをかっぱらってきて、資料も全部かっぱらってきて、それを基礎にやって、そのうちだんだん資料がふえてきて、通産省や農林省を通じて統計がとれるようになりました。当時の農業統計なんてのも、これは後で問題になりますけれども、分化しておったわけです。つまり、統計調査部というのはないわけです。統計課といわれているものはごく1課であって、食糧統計にせよ、土地は土地統計でやるし、農業経済は農業会がやっている。ですから、そういう部局もないですから、統計事業が各課に分散している。そこでそういう資料をかっぱらうと同時に、こういう形でいろいろな人に頼んで、統計の源泉を提供して

もらって、それを手がかりにしてまずつくったのが生産指数ですよ。これは昭和12年を基準に、たしか21年の12ごろにまず生産指数をつくった。それから穀物の生産量の戦前に対する水準というものを確定しなきゃいけないそれと物価指数をつくるということで おまえは蜷川さんのところで習ったんだからとにかく統計指数をつくれということで。めちゃくちゃですが、基礎もないのに方々から生産高聞いてきて、集めて、とにかく生産指数というものを確定したことは確定したんです。これがほかで何もやってませんから、役所から聞きに来る、新聞社が聞きに来る、とにかく自信がないのにもかゝらず、これが唯一の生産指数でした。

そのころは生産指数については進駐軍もぼくのところにもらいに来て、初めびっくりしてたですけども、そのうちに進駐軍が9-11年の指数をつくり出して、そのときにぼくのところへ来て、おまえのところの数字はオレのところよりも戦前に対して水準が低過ぎるということというんです。そんなに落ち込んでない、せいぜい50%ぐらいだ。ぼくのところだと20-21年は30%ぐらいに落ち込んでいる。ここでかなりやりとりしまして、結局向こうの考え方は、既存している重工業の物資を中心に生産指数をつくっているでしょう。ですから、当然戦争中にそういう重工業はふくらんでいますから、どうしても水準が高くなっちゃうんですよ。そこでぼくの理論の方がいいということで、その後、アメリカもそういうのです。

大屋 内海先生が東京に出てこられたのはいつですか。

内海 私が東京に出てきたのが23年だろう。

その前に21年に帰ってきたら、21年の末か22年の初めに恩田が尋ねてきて、「京都にいたら貴様飯食えないぞ。東京で木村がたまえに国民経済研究会の統計班長というポストを用意しているから、蜷川のいうことを聞かないで出てこい」といった。ところが、それができないんだよ。それでひどい目に遭っちゃったんだけど。

大屋 これからしばらくお二人で戦後21年、22年、23年。そこらあたりの国民経済のことをお話願うことにしましょう。

内海 大橋が首になったのは2・1ストのときだろう。

木村 首になってないですよ。22年に解散したわけですよ。

内海 10月闘争のときか。日本鋼管の労働組合の初代の委員長だ。

木村 あれは23年かな。

内海 この間調べたら「委員長大橋隆義」という名前がちゃんと出ていますよ。それから、あなたが国民経済の嘱託にして、それから、東京工大の経営経済学教室の経済地理が何かやる人、あれが大橋を東京工大に連れていったんだよ。

木村 磯部さんじゃないの。

内海 磯部じゃない。その前の人ですよ。それで大橋が経営統計学というのを始めたんだ。

大屋 この「経済統計資料」の第1号は、昭和22年ですね。

佐藤 木村先生の生産指数の理論は25年ですね。

木村 25年です。だからその前の12年というのをつくっ

た説明が何もないんで、それは無理論であった。ですから、25年で改訂したのはまだずっと後です。

佐藤 42号というやつですね。

木村 ぼくの方から先に続けて片づけてしまうと、当時はやはり客観的にはノッパインテリの失業が方々でみんなふえていったわけですね。これは口ではいわないけれども、稲葉さんの問題意識もあったし、ぼくらもそうです。先へ帰ってきてますからね。それで、帰ってきてもみんなやみで儲けて食っていこうなんという人はノ人もないんで、一時そういうインテリが本当に危機になったそういう形で何とかっないでいこうという意識はかなり積極的であって、そのうち世の中落ちついたら大学に帰ろうという形です。もちろんぼくらの友達でももと満鉄関係の高木幸二郎というのは、あまえにテストされたなんていっていた。(笑) 別にテストしたわけじゃないけれども。だから、いろいろな人がそのときみんな集まってきたわけですよ。こっちも何とか紹介したいということもあったわけですからけれども、そのかわりに、そういう形でかなり政府は大まかに資金を出してくれたんですよ。それでできたんだから。

大屋 国民経済協会というのはいつできたんですか。

木村 20年の10月です。稲葉さんは企画院にいて企画院事件で引っかかって、18年ごろ出てきたんですね。その間、当時の統制会社の何かにいたわけですが、戦争が終わると同時に岡崎文勲さん、陸運局長に出た三島大佐といったですかね。そういう人たちが、ノッパ企画院で集めた資料とスタッフをどうにか生かして、戦後の再建をやろうという意識があったし、岡崎さんにしても

三島さんにしても実に統計の好きな方ですね。この仕事の中でも、かなりこつこつと岡崎文勲さんがやられたけれども、そういう人たちが資料を持ち寄ってきたのと、人的財産、それを基礎に国民経済ができた。

企画院というのは満鉄調査部と陸海軍、それから一部東亜研究。そういった形の人を継承してつくったというのが実態ですね。ですから、当時は海軍だとか陸軍。紙がないですから、そういう原稿を利用して、みんな原稿を書いた。金属工業会と国民経済と2つになっているでしょう。この金属工業会というのは別にこれは当時の重工業関係の団体としてあった調査会ですね。そういう人が一緒になっている。

大屋 この中の第2号に「インフレーションの測定に関する一私論」というのがありますね。

木村 あれはぼくが書いた。だから、みんなやや学術的なものと業務的なものがチヤンボンでね。しかも10日に1回出せというんですよ。10日に1回というのは大変ですよ。やたらにとにかくみんなに頼むというわけで、剰余価値率の上移のあれだつて、期間はかかっていたにしても、10日目に出した1冊に出しているんですから。

内海 あなたの物価体系論が有名になったのはいつだったかな。

木村 24年です。

内海 半佐美誠次郎があなたの意見を採用して。あれは木村太郎じゃない。ペンネームだったろう。

木村 森山一郎。

それは片っ方で物価指数つくったわけですから。物価指数も、当時、インフレ測定に非常に大事だったんです。

物価を測定するといっても、当時は公定価格とやみ価格というのかなり格差を持って分かれているんです。ですから、日銀は確かに一応細々ながら、小売物価指数を発表していましたが、みんな公定価格なんですね。だから全然役に立たないんです。やみ物価指数がないというんで、ぼくがやみ物価指数というのをつくりました。ただ、それをどうにかして統合して、総合的な指数にしたいということとをいろいろ考えてみたんですけど、とにかくやみのウエイトというものがわからないし、どうしても総合化はできない。

そこでぼくは山田亮三と二人で盛んにやみ物価指数をつくった。それをやっている間に、当時、重工業品というのが戦前の生産指数に対して非常に低いんですよ。当然のことながら、お米だとか、砂糖だとか、衣料だとか、建築材料とか、そういったものが戦前の統計に対して、300倍、400倍と高い。非常に格差がある。この格差を平均しておしても全く意味がないということに気がついた。

むしろ当時における物価の運動は、そういった価格体系の混乱にあるということから、当時、やはり一方ではわれわれ考えていたのは、具体的には有沢さんの傾斜生産論になっていくわけです。稲葉さんなんか主としてやっておられた再建計画は全く重工業中心なんですね。そして基礎産業を中心にしていくという考えで、この再生産論の裏側を見ると、やはり非常な重工業の危機のわけですね。そういった側面がないので、むしろそれを何とかしようというのが実際のあのときの傾斜生産論の内容ですね。

それをぼくなりの方でまとめて、「国家資本主義の動向」という論文と「社会科学」という雑誌に「独占資本と物価対策」を書いたりした。

これは表側は、ぼくらも、稲葉さんを中心にして傾斜生産論でやっているわけですよ。ところが、どうもそれがぼくらの考えからいうと、当時の統制を強化をする考え方、農民を抑圧する考えだし、またやみ資本に対しては特に厳しい対策をとっていたわけです。それについては、共産党の方も若干それに協力する関係で、ぼくらはやはりむしろ一面からいえば、そういうやみの方がむしろ自由だというようなたてまえを大いに主張した。それはそれでまたシンパがつくもんで、当時の国民経済の会員には、繊維業者もいれは鉄鋼業者もたくさんいますから。そういう問題意識がはっきりあったとはいえないけれども、当時、大森山の1丁目に住んでいたんで、木村太郎というのを略して森山一郎という名でそれを発表したんです。

これは当時、むしろいことに、共産党の理論とぶつかるわけですね。当時、共産党の調査部や方々の大学にもいたけれども、あれはけしからぬというわけで、訂正しろというから、訂正するより批判しろ。オレは統計にのっとしてあれをつくったんだから、君の方で論駁したらいんじゃないかといったんです。

だんだんそれが正しいということになった。まず宇佐美君がそのころ「潮流」に独占資本主義も書いていました、「これがいい」といって、彼がその論文にぼくのやつを引用しちゃったわけです。最初の「危機下における国家独占資本主義」ですか。最初の版ね。あれはそういう

ことがはっさき書いてあるけれども、宇佐美君がそれを
まず引用しちゃって、あれが一番いいということから、
どうも共産党も反対しにくくなっただんじやないかと思う
んです。

そのうちに、これはまたおもしろいんで、大体うちに
いた山田亮三君、それにさっきいった今井則義とか参加
して、あの理論で行こうというような研究会ができて、
そこに当時おられた井汲さんが入ってきた。研究会をつ
くったのが、やや政治的な構構派理論になってくるわけ
ですね。「日本経済研究年報」ですか、あれを日評から出
したでしょう、ぼくの意図はそこにはなかったんだけど
も、次第にそういう形になっていった。

それと同時に、これは知らなかったんだけど、そ
の論文をぼくの知らないうちに、ぼくはそのころ手島氏
知らなかったんですけど、手島氏が「労働評論」という
本を出して、それに「志賀・森山・宮川の理論」といっ
て、えらいぼくの論文を紹介してくれたけど、順序から
いうと、志賀さんが当時共産党で偉かった。宮川さん
も偉かったでしょう。その真ん中に森山という名前が書い
てあったので、これは共産党でよっぽど偉い人かとい
ふうに手島君が思ったというんです。(笑)

内海 こういう議論なんですよ。「1800円ベース体系」、要
するに恐慌状態に陥っている繊維部門。そのとき、やみ
価格が27倍ですよ。それをやみ価格よりも60倍か70倍に
引き上げるわけです。電線をやみ価格の3倍ぐらゐに引
き上げるんです。それから、手ぬぐいが1本戦前の1000
倍なんだ。それを60倍に引き下げるんですよ。要するに
いま戦争がなくなつて危機に陥っている重工業部門を救

着して、逆に繊維部門やなんかでもすごく高くなっているやつを抑えつける、これが国家独占資本主義の物価体系なんだ。お米は何倍に抑えつけたかな。4倍かな。低いんですよ。これを実行すれば、全く日本資本主義が救われるんだという大変おもしろい議論ですよ。

木村 いまは常識になっていきますけどね。

内海 そのときは非常にユニークな議論だった。私も読んで、木村さんのものはあまり感心しないんだけれどもあのときは感心しました。(笑)

大屋 さっきのお話があった大橋先生が経済表に関する資料を2回出していますけれども、これはやっぱり傾斜生産みたいなものですか。

木村 それとは全く関係なしに、多少、再生産図式をマルクス経済学的につくろうという意識があって、遂に大橋君のためにテーマを考えたようなものですね。やってくれないかといったら、彼は克明にやってくれたわけですよ。そんなに高い原稿料じゃなかったらうと思うんですけど、非常に凝ったものをつくってくれて評判よかったですよ、財界やなんかには。

大屋 それとさっきお話がありました上杉先生の「日本工業における添加価値並びに剰余価値率の計算」、この2つを考えると、現在の加工統計、あるいは統合統計、組みかえ計算の原型みたいなものが昭和22年に始まっている。なかなか興味ある問題ですね。

木村 上杉先生のところはないというので、ぼくが探し出したんです。

そのころでおもしろいのは、いま金が問題になっているけれども、そのやみ物価と公定価格を何とか統一して

中間的な指数をつくろうというんです。そこでこっちは山田亮三やなんかと手分けして、新橋やなんかに行つてやみ価格を調べてきては物価指数をつくったわけですよ。当然、どうしてもエフを平均してやっても意味がないし何が中軸になるか。それで金を調べるんですね。当時、金を横須賀でかなり水兵が売っているんです。金で大体見ていくとちやうどいいところがある。金をかなりやみで調べました。

もう一つ、ぼくの均衡指数というのは、結局、やみ物価と公定価格との統一物価というものを模索する一つの試みとして、その中間項にむしろ数量説を逆用して中間的な水準をはかれないかということが一つの目的で、そういうことをやっていたということです。それをだんだんやっているうちに、結局農林省の方で統計協会というのをつくる。そして農業統計を独立させていきたいという意向がありまして、おまえやってくれないかということ。これも1年間ぐらい国民経済と重なってやるんです。25年から公価格生産指数をつくったころは、むしろ農林統計協会の仕事の方に入っていたと思います。

内海 その前に、稲葉さんの一党がみんな安本に入っちゃったいきさつがある。国民経済が空っぽになっちゃった。

木村 それは23年ごろですよ。われわれがやっていた仕事自体がすでに企画院の延長ですし、それを中心にして経済企画庁をつくろう、当時の経済安定本部ですね。そういう形で、都留さんがたしか副本部長、そして稲葉さんが官房次長かなんかに入つて、国民経済の手勢を半分ぐらい連れ去った。当時における経済安定本部の経済

企画の第1次案というものを、従来のわれわれがやったやつを素材にしてつくった。

同時に、生産指数、これは商売にならないですね、初めのうちは商売になったけれども。そこで生産指数もすべて企画庁に引き継がそうということで、企画庁は結局ぼく物価指数の理論に基づいて、滝君という、いま富山大学に行っている彼が事務的に引き継いでやりました。当時は戦前基準で全部やっていましたから、9-12年平均ですね。

内海 9-11年平均。

木村 9-11年平均、12年がぼかっと多くなるんですよ生産指数でいいますとね。12年はもう戦時経済ですから9-11年基準の生産指数をそれからつくるようになったと同時に、そのつくるころに通産省でも生産指数をつくらうということがありまして、ぼくの本が若干影響したと思うんですけど、正木さんが統計局長だったものですから、生産指数の作成委員を命じられた。通産省の初めの「指数の話」とかなんとかいうのがありますね。あれのもとを伊大地君やなんかと一緒にやったことがありますし、この指数の理論を発表した当時に統計研究会からぼくは呼ばれて、労働価値説の生産指数なんというのはけしからぬというほどでもないんだけど、そういう勢いもあったと思うんです。結局産長になったのは当時生産指数といえば山田勇氏ですね。ぼくも彼の仕事には敬意を表している。それから伊大地君、高橋長太郎君、そういう方が生産指数について意見が違うという形で、そこでは大分論戦をやりましたけれども、そのとき意外に山田勇氏が賛成してくれて、これはいまだに

わからないんだけど、山田勇氏と伊大地君は非常に賛成してくれて、高橋長太郎がものすごく反対したんですね。これはぼくもちよつとわからないです。もう2〜3人だけいたです。

内海 その辺は統計研究会の記録にちゃんと残っているみんなプリントにしてある。

木村 それで、そのころの生産指数を引き継いだころの企画庁は、結局通産省は9-11年はつくらないのです。9-11をやめるときに通産省が引き継いだわけですけど9-11年のときの統計課長をやっていたのが竹内、あれが統計課長で、彼がぼくのやつに賛成して、彼はあれで労働生産指数やなんかの論文を書いています。

内海 レッドページは25年か。

木村 だって上杉君は国民経済の囑託から通産省へ行っ
て首になって、また農林統計に来た

大屋 木村先生の話を昭和25年あたりで一応切って、次に内海先生の方のお話しをもうかがいすることにしよう

大屋 ところで先生、何年のお生まれでございますか。

内海 明治45年7月4日。当年限って69歳。

大屋 とちらのお生まれですか。

内海 東京市本郷区駒込神明町。いまの本駒込4丁目、吉祥寺の裏です。富士前小学校は6年の半ばまで。後はずつと成城です。小学校の終わりから、中学校、高校、みんな成城です。

大屋 京都にいらっしゃったのは、何か理由があったのですか？

内海 私の家は貧乏だったもんですから、浪人してもい

いから東大へ行くと学校に申し上げたんですが、実は在学中、社会科学研究会のことで何度か警察へ引っぱられまして、お情けで卒業させてもらった。それが学校にとっては何度目、私自身にとっては何度目の検挙で、とうとう詰腹切らされちゃったんですね。

大屋 それは昭和何年ぐらいですか。

内海 二度目のときは昭和4年の12月でした。田中清玄が共産党の中心人物だったときです。

大屋 第3次共産党員検挙、これに関係してですか。

内海 そういう大きな事件じゃありません。共産青年同盟の下部組織みたいなものが法政、成城と、順にやられた。私はそれのただのヒラの会員だったんですけど、前からつながっている、古い創設以来の社研のメンバーだったんですから引っぱられまして、そのときに、一人は前の東京都議会の議長をやった久保田幸平、それからもう一人は、一ノ関の商工会議所からこっちへ来て偉くなっていった清水という男。この所で一遍にやられたんです。両方から私の名前が出て、特に清水はほかの人を隠すために、内海に頼まれてやったという陳述をしたんで、岩手から手が伸びてきまして、一ノ関の帰郷運動で、結局私がつかまった。知らぬ存ぜぬで一切清んじやった。知らぬ存ぜぬといい張ったことが後でばれて、かえっていけなかった。そのときに一緒にやられたのがいまの久保田、清水のほか、「ドイツ経済の奇跡」と訳した菅良です。そういう連中がとにかく一応つかまえて、おまえはもう二度目だからかばってやり切れぬから、退学願を書けといわれて書いた。

しかし、いろんなことがありまして、結局高等学校、

大学をちゃんと卒業していないと飯が食えないということを見つけた。その話は省略します。その間に1年以上ありまして、その間ずっと農民組合の下働きをやっていたんですが、いまこの話に関係ありませんから省略します。

それで学校で、お情けで卒業させてやるんだから内申書をよく書くわけにはいかないぞというんです。私が育ててもらった先生がそのとき生徒主事でごでいまして、私を呼んで、「おまえ、東大へ行たいといっているが、東大は銭はおまえができたって入れてくれないよ、試験のないところへ行け」、「どこですか」といったら、京都か北海道というんですね。それでしばらく考えて、やっぱり京都におまえの仲間たち、というのは具体的には加藤惟孝とか、それから古谷綱正とか、そういう連中がみんな行っているんだし、向こうに行きやさびしくないだろう、行きなさいというんで、東京に願書を出してくれないわけですね。それで結局京都へ行った。

あのときは、ご存じでしようけれども、各高等学校が縦につながっている。それで行きましたときに、ちょうどギャング事件のときのピストル密輸事件がありましてそれで成城の人間が引つかかったんですよ。あれは藻谷小一郎が中心ですけれども、その藻谷小一郎を東京に迷がしてかくまったのが成城の連中。その連中がぐずぐずいろいろやっています、京都へ行ったら、京都でおまえが行ける演習は蜷川のところだけだ、ほかの演習に行ったら受け入れてくれぬぞとかなんとかおどかされました。そのときのグループは、みんな死にました。

大屋 蜷川先生のゼミにはいられたのは昭和何年ですか

内海 昭和9年です。昭和8年が滝川事件。8年は私は京都に籍があるだけで、東京でまだ「ゴゴ」が悪いことをしてましたから、事実学校へ行っていません。そのときに滝川事件が起こった。だけど、行ったときも、京都の駅へ刑事さんがお迎えに来ているという状況でございましたので動けないんです。それでその前から、これから成城から大物来るぞって、私が大物になっちゃった(笑)

大屋 何かどこかの事件で名前が出て、どこかの事件で名前が出て、その累積度数の多いのが逮捕の理由になりますからね。

内海 私の下宿の前に床屋がありました。私が学校へ出ていこうとするとその床屋からお伴があらわれるんですね。こっちはそれに気がつかないで後で気がついたんだけど、そういう状況だったんで、滝川事件は私は学生大会に顔を出して並んでたというだけで、しかし、そのおかげで滝川事件の「ごたごた」で学生課にも呼ばれなかったですよ、逆に。

滝川事件のときのことは来年中に、「滝川事件と学生運動」という別の企画がありますから、それはそのときに書くつもりです。その翌年に坂出秋彦、三島克騰、木下孝夫、この連中が滝川事件の成城のグループの中心だった。たしか坂出に、蜷川のところへ連れていかれた。

それが始まりで、もちろんそのときは統計やる気なんかなくて、何やろうかと思っていると、私は日本のこれから農業革命をやろう、農地改革をやろうというのに農業綱領がない。だからぼくは大学に在るうちに農業綱領を研究しようというわけで、学校をサボって下宿に立て

こもって一生懸命やって、農村における階級構成というものを勉強いたしました。

大屋 それは同時に蛭川先生のゼミにもなるわけですか
 内海 じゃないんです。蛭川さんにはそれじゃなくて、米の生産費をやらされたんです。私は農民組合の下働きもやっていたし、農業についていっぱし生意気なことをいっていたわけです。「ロシアにおける資本主義の発展」式のものを読んで、特に一生懸命読んだのは、「5年、7年の革命における農業綱領」ですか、あんなものを一生懸命読んだ。そうしたら、農村における階級構成、貧農が何人、富農が何人、そういうのが出てきたんで結局わからなくなっちゃった。何か農民組合をやったときに大いにわかったような気がしてたんですけど、まるっきりわからなくなった。特に蛭川さんに米の生産費を研究してみろといわれたけど、生産費の位置づけができないんですね。封建性とかそういうことは、大変生意気なことをいいますけれども、蛭川のゼミ2年間で結局何がわかったかということ、自分が何も知らないということです。それまでは大いに知っているつもりだったんです。

それで2年後に「おまえ何をやる」というから、もつと米の生産費をやらしてくれといったんです。その前に近藤先生の家を訪ねていってみたりしました。そのとき私を連れていったのは、新座の市長の小船清です。それで昔の農民組合の仲間にいろんな話をしてみたりしたんですが仲間も何をやっていたんだが知らぬ、何も知らないんですよ。それがどのくらい何も知らないかということ私のところにいまどうしてかわからないけれど、当時書いた農業綱領の草稿の第2部があるんです。第1部は埴

谷雄高が書いたんです。2部から後が全部残っている。何ということないですよ。綱領なんてもんじゃなくて、グラグラグラグラ何十ページも人の本を写している。あんなレベルでやっていたのかと思うと情けなくなっちゃうですね。それで、農村における階級構成をやめて、やめてというよりもできなくなっちゃって、米の生産費になっちゃった。

米の生産費もわからないんですよ、全く暗中模索でシコマーレンバッハの「原価政策」を読んだり、近藤さんの本を読んだり、ただ手当たり次第にやってみて、何を論じていいのかわからない。いまでもわかりませんけど。

大屋 「日本発達史講座」は、そのころ先生は大分お読みになりましたか。

内海 京大の学生へ山田盛太郎を持ち込んだのは多分私だろうと思います。確か昭和9年の春です。ゼミに入っていたばかりのとき。そうしたら、何だか年取った学生が大ぜいいるんですよ。何だといったら、澄川は北海道大学を首になつてきたとか、それから鈴木重歳がいま6回生だとか、安井謙が、あれも1年おくれだった。3回生であるべきやつが4回生だったはずですよ。そのころ安井はマルクスで、ソシアルダンピング論の報告をしましたが種本は笠信太郎と山田盛太郎でした。あんまり統計やらないんですよ、みんな天下国家を論じるのばかり好きでね。吉田山の上で最初のゼミのコンパがあったんです。そのとき先生が帰ったあと澄川英雄と手島正毅と鈴木重歳と安井謙と私と、もうノ人ノ人で酒を飲んで議論を始めた。そのとき私が山田盛太郎を振り回して

澄川の方は旧プロ科の理論なんです。科学同盟とかいうプロ科の最後の形態、あれをやったのが澄川英雄なんです。がね。ずっとこっちにいましたけど、いま山口の方にいます。これは北大を首になつて京大へ来た人で、そのときから頭が上がらない人でした。それで山田盛太郎の農業について、上からの資本主義の発展はないと、寄生地主氏の法則を振りまわしたんです。そうしたら、そんなバカなことはないって反対されました。何だかただ声を大きくして議論したことだけ覚えています。

大屋 そのころの蛭川先生のゼミの風景、状況はどういうぐあいでしたか。

佐藤 蛭川先生は昭和10年に学位をとってゐられるわけですね。

内海 それがまた大事件だったのです。それはこういうことなんだ。あの論文が提出されたのは7年です。

大屋 あの論文がというのは「基本問題」ですか。

内海 「基本問題」たしかに7年だった。

大屋 先生がちょうど学生のころですね。

内海 直前です。私が学生のころにできたのは「概論」です。「基本問題」は蛭川式に主語が2つあって述語が2つあるんです。あれを読んで「先生、日本語下手だね」って私がいったことがあります。「主語が2つあって述語が2つあるような文章なんてダメじゃないか」といったら、それを気にしたらしくそれから後にはないですよ。そういう文章でした。とにかくこれが出まして、八木芳之介と谷口吉彦と一緒に助教授になつていた。通らなければ教授になれない。そうすると八木や谷口はとっくの昔に教授になっちゃつて、蛭川だけ助教授なんです。

東京でも同じこと、有沢さんだけが万年助教授でいた
そのときの話は犬連の犬知ホテルの3階か4階で蜷川が
堀江邑一さんに話しているときに、私も傍にいたんです
けど、どうしても通さないんですよ。それは汐見三郎が
一等いじわるで、噂では汐見三郎の計画は蜷川を追い出
して岡崎文規を後任にしようということでした。そうす
ると賤部さんはああいう消極的な人だから、だれかが反
対すると何もやらない。もう1人の選考委員が高田保馬
高田保馬も反対だという。

それがあんまり論文をいつまでも通さないんで、新聞
に書かれたんですよ。毎日新聞の学生欄というのがあっ
て、その京都支局にいて編集していたたしか藤田信勝
が、蜷川の論文が通らないと新聞記事に書いた。「学界
明暗の筋道」というタイトルで、あなたの論文はどうい
うところがユニークなんだと蜷川にインクビューして、
それでちゃんと答えたやつが当時の毎日新聞にあるはず
ですね。

そうしたら、それを見てか何か知らぬけれども、経済
学部の長老というのは神戸正雄なんです。あの人は学部
の創設委員で、河上肇さんの自叙伝を読むとくそみそに
悪口いつているけれども、実に穏健な、とにかくオレが
京大経済学部をつくるんだという意識で何かやっている
わけですね。その神戸先生に蜷川が呼ばれたんですよ。君
の論文を読んでみたが、あれはいいじゃないか、しかし
高田君が反対だといっているんで、私の前で高田君と議
論をしてみてくれといわれた。ああ、喜んでということ
で電話をかけて、神戸先生と一緒に高田先生の部屋へ行
ったというんだ。

論点が3つあった。私は2つしか覚えてないんだが、「君は教室でオレの悪口をいうそうじゃないか」というのが第1の論点。(笑)「私は博士号が要らないなんていつてんじゃないんで、もらおうと思って出しているんだ。先生が審査員だということがわかつているのに、どうして教室で悪口をいったりなんかするんですか」という反駁をして、これで第1論点が終わったわけ。

第2の論点は、君の論文にはオレの本が引用してないじゃないかというんだ。(笑)うそみたいな話ですよ。直接蛭川から聞いたんだから間違いないですよ。「それは先生、私の本は文献目録じゃない。関連があるところで引用している。副論文の「統計学研究」の方にはちゃんと先生の論文を引用しているといったう、「ああそうか」ということで、これで第2論点はおしまい。もう1つあったんだけど、それもそういうたぐいだった。そうしたう神戸さんが、「高田君、それだけかい」っていったって。(笑)それだけだって、もう何もいわない。そうしたら高田さんが、今度は蛭川の論文通すようにしようといい出した。その時賤部さんが書いた論文の審査報告が京大に残っていると思うんです。何かずいぶん辛らつな審査報告だそうですがね。それを聞いていて、これは通らないんじゃないかと思った人がいたというんです。だけど無事に通った。

ところが、教授になる資格ができたとき、まだ賤部さん生きていますよ。私たちが賤部さんの最後の講義を聞いた学生なんですが。

木村 おそらくぼくも賤部さんの講義を聞いたですよ。

内海 もつと後かな。何だか黒板の真ん中に「中」とい

う字を書いて、試験問題ですよ。それで帰っていつちゃうとか、奇行に富んだ人でした。京大には奇人が多いんです。(笑) その答案に、それは平均論を書いたらいけないんですね。やっぱり「大学」「中庸」の「中」と「中庸は徳の至れるものなり」ということとの関連を論じなくちゃいけないんです。

大屋 平均論のことですか。

内海 ええ、そうです。考えてみれば、それ一通ることだけれども、講義でそれをやるんですね。学生はキツネにつままれたようで、何の講義されたかわからない。それも大変な物知りで、特に晩年には漢籍ばかり読んでいましたね。変なことを研究に来る人は、指導教官はみんな賤部さん。(笑)

大屋 青盛さんはまあいろいろありますけれども。(笑)

たとえば、このごろその人の本が出てきたけれども、沢崎賢造(?)あれはカトリックかなんかの宗教をやりたいそうすると、指導教官は賤部さんに決まっていますとにかく、議義聞いたって、何いってるんだかわからないようなこといっぱいやるんです。たとえば「四条京阪=シンそぼあり」なんていう有名な言葉。統計学ですよ。=シンそぼを何か大量観察するんだっていったな。

(笑)

賤部先生は河上さんを追放したときの学部長でそんなことを苦にしてかお家でもって庭に出たかと思うと「ワーツ」と叫んだり、アル中で年じゅう飲んで、自分でしたくないことやったってことすごく後悔していたらしいんです。酔っぱらうと歌う歌が「ローレライ」と何かで、田井政助という、後で九文へ行って、それから建国

大学へ行つて、中共に銃殺された事務官がいて、それがいっつも飲む相手で、聖護院のおでん屋でしょっちゅう飲んでいた。

そのときの私の蜷川ゼミの仲間の松浦素、あれは貴族で伯爵、長崎の平戸の殿様なんです。それが学習院から来ていまして、財部先生の部屋に残りはしなかったんだけど、財部ゼミにいて、柳沢統計研究所の跡取りだった。だけど、戦災で柳沢研究所は消滅しちゃった。それで、私は松浦にそのいきさつを聞いておこうと思つたら、去年死んじゃった。ちよつと手おくれでした。

とにかく、彼は財部さんのゼミと蜷川さんのゼミに出ていました。

佐藤 そのころ統計学の講義は誰がやっていたんでしょうか。

内海 だから、蜷川さんの統計学第Ⅱ部というんだね。担当の講座は会計学です。それまで会計は独立の人がいなくて、東大の上野道輔が来てやっていたのを、独立の講座にして会計学をやった。何か蜷川さんのお父さんかなんかが幕臣で、深川の貧乏士族で簿記を教えたりしていた。どこかで蜷川さんいつているけれども、統計と会計、両方とも、「計」だからやれといへて。(笑)それで結局、上野さんとその関連文献を一生懸命読んで会計をやった。

私たちのゼミは、統計の翌年が会計という順序で、私たちが2年のとき、すさまじいやつがそろつたのが統計のゼミで、3年のときが会計で「経営分析論」というのをやりまして、ゲルストナーとルフトルを読まされた
木村 ほくらのときは、蜷川さんはもう「統計学Ⅰ」で

したよ。

内海 財部さん、講師かなんかで-----。

木村 いやいや、講師じゃなくて教授であられたけれど”
も、Ⅱの方をやって、蜷川先生が会計学をやるときに選
択です。

佐藤 14年に、蜷川先生が経済学第3講座を担当した。

佐藤 いや、統計学講座は16年に存っているはずですよ。
第3講座-----。

木村 会計は16年？

内海 とにかく、正式の担当は財部先生が辞められるま
で会計学ですよ。

木村 14年に経済学第3講座の教授になっている。16年
に経済学第3講座の担当を免ぜられて、統計学講座担当
を命ぜられているんですね。

内海 それはおそらく会計学だよ。

大屋 そうすると、ゼミなんかで基本問題の話なんかは
先生あまりなさらなかったのですか。

内海 学生の方は天下国家ばかり論じていましたからね
(笑) 論客みたいなものですね。

鈴木重蔵という戦後中国に止っていて北京大学の教授
になって数年前に死んだ人がいて、いま中国から通訳で
来る連中には、鈴木日本語学科の弟子が多いとのこと
です。あれが河上肇先生の一番末の娘の河上よし子の亭
主です。

木村 率直に言って、学生は、むしろ本当の意味で蜷川
統計学をやろうなんという気はなかったんじゃないのか
ね。ところが、先生からいえば、あまり天下国家を論じ
られては困るわけですよ。学生の方は天下国家ばかり論

じなし、その方がおもしろいわけでしょう。ですから、
 對手なんか、内海さんとかそういう速中から、ちよくち
 よくぼくら、もう少し統計学やれよということといわれ
 たですよ。それでぼくも仕方なくやった。

内海 やつても、「ソーシャル・ダンピング論」をやまわ
 けですよ。それはそっちの方がおもしろいから。笠信太
 郎や山田盛太郎の論文なんか持ってきて、「インド以下の
 低賃金」なんてことばかりやるんだ。やっぱり当時のわ
 れわれのレベルの低さなんでしょうけれども、政治的ス
 ローガンに直接結びついた系列では頭が整理できている
 けれども、米の生産費をやれとか、貨幣の購買力——足
 立久美男がフイツノカーの「貨幣の購買力」をやりました。
 そういうのをやつても、自分で何やっているんだか
 わからない。

大屋 統計の国際比較のほしりみたいなもんじゃないで
 すかね。

内海 それはそうですよ。「インド以下の低賃金」を一応
 やっていましたから。

木村 だから先生も、あるいは先生の對手たちも、非常
 に困って、何とか統計をやらせようというんで、ぼくら
 のときは物価指数の材料をこんなに与えられたですよ。
 とにかくこれを計算して指数にしてこいということで、
 計算機も見たとはいわけるですよ。前の手動計算機だっ
 て見たことない。だけど、それを夏休みに計算やらされ
 たですよ。

内海 そのときは、私もういない。

木村 もういない？

内海 その5月に、私は満州に行っちゃったんだよ。あ

ればたしか昭和13年でしょう。

木村 それも1回で終わったからね。それは先生の苦心の作だった。

内海 この日銀物価指数の計算はある失業者の人もやって一つ一つの品目についてやろうとしていたがどうなったのか不明です。私たちは夏休みは外国語の本なんだよ。その前の1学期に、いまの数理統計の全部の宿題を出された。平均偏差、何とかかんとかって相関まで、これみんな書いてこいというので、いま千葉商大で統計学をやっている小島豊と私とで鈴木重蔵の家へ行って、それをお互いに写したりなんかしてやったのを覚えてるんだ。とにかく、あまり数理的なものはやらなかったですね。

大屋 そのころ先生、大学卒業されて副手でしたか？

内海 副手になった。貧乏ですから、大学院には入れないですよ。

大屋 そのとき何か副手になるための条件のようなものはありましたか。

内海 条件はありません。

大屋 論文も何もなしですか。

内海 ええ、つまり「これを副手にするよ」といえば、まずまず普通は反対がない。成績がものすごく悪いということがなければ。

だけど、私は学校の勉強しないから怒られたですよ。

おまえに奨学金取ってやろうと思っているのに、こんな悪い成績ではと怒られた。きさまの頭じゃこんなもの取れないはづがないと大分やられた。(笑)

大屋 そのころ、副手になられてからは、少しは統計の

方に焦点がしぼられたのでしょうか。

内海 はい。「何やる？」っていうから「私は米の生産費がわからないからもつとやる」といったら、「バカやろう二年もやっでわからないなら別なものをやれ」「何やるんですか」と聞いたら、ハーバーラーの“Der Sinn der Indexzahlen”を渡された。それがいけないんだよ。この本を読み終わるまで、おまえは日本語の本を読んじやいけない。(笑) これをあけてみたら、1行に3つも知らない単語があるわけだね。外国語なんかやる気全然なかった。高等学校のときでも、政治運動ばかりやっていたから、ドイツ語なんかやらなかった。それで泣いたですよ。1月たったけれども、まだ最初の20ページぐらいやっている。(笑)

それでいま覚えているのは、夏休みなんですけれどもみんな休みになって、「じゃ、ちよつと家へ帰ってきます」といったら、怒って、「きさま、一体いつ勉強するんだ」といわれた。ところが、京都の夏の暑いこと暑いことぼくは貧乏ですから、人が10円払うのが普通なんですけれども、私のところは7円だったかな、大工さんの家の2階かなんかで一等きたない下宿で、そこで1人で、しようがないんで一生懸命泣きながらやった。そのころ私ちよつと神経衰弱だったんですね。夜眠れなくて、催眠剤ばかり飲んでいて、こんなにお腹が出っ張っているんじゃないなくてやせていた。何とかかんとか、1年かかってようやくハーバーラーの“Der Sinn der Indexzahlen”を読んだ。

当時、すでにその前からですけれども、蜷川研究室はにらまれていた。何の用があるのか知らぬけれども、し

よつちゅう研究室の入口に刑事が立っているんですよ。
 3階なんです。3階へ上がっていくと、その辺に3人
 ぐらいたっていたことがありました。
 しかし、勉強をさせられたというよりも、行儀見習い
 ですね。主にやうされたことは。どうせ政治運動のごろ
 つきみたいなもんですから、非常識な人間でしょう。ま
 ず一番初めにいわれたのがおじぎですわ。「そんなおじぎ
 の仕方があるか」といって。学生的时候はそんなことな
 いんですよ。勝手にさせていて、副手になった途端にう
 るさいのうるさくないの、大変なんです。まるで封建制
 の権化みたいな先生でした。一等初めにとにかくおじぎ
 の仕方て怒られた。
 それはこういうことなんです。小便さんが私に礼をし
 たときに私がしたおじぎを先生が見ていて、真赤な顔を
 して、こんなになつて怒っているんですよ。それで「何
 ですか」といったら、「きさまは、さっき小便さんがおま
 えにおじぎしたときどうしたか」「はい、私もおじぎしま
 した」「何がおじぎか。ああいうのはあごでしゃくるとい
 うんだ。河上先生は小便さんに最敬礼したぞ!」といっ
 てとられました。いまでも私、おじぎするたびにその
 ことを思い出して、(笑) もう少し深くしなければと思う
 蜷川の部屋で何したかという、おじぎをすることを覚
 えたんです。
 はかまをはかないで冢へ行ったというんで玄関から追
 っ払われるし、先生がお茶を飲まないうちに飲んだら、
 そういうことは礼儀にかなわぬというのです。民主主義
 なんてもんじゃない。(笑) それから、たばこをたばこ盆
 から取った。そうしたら、「そういうのをお先にたばこって

いうんだ」って怒って。あるからのんだっていいじゃないかというのがわれわれの観念ですが、それはいけないんだそうです。

木村 助手、副手、あるいは大学院生というのは、先生は全然違った扱いをしておられた。

内海 学生に対してとはとかく全然違うんですね。そういうことはわかりですよ。いつでも恥ずかしいようなこと、いっぱいあるんですけども、そのかわり、個人タクシーの女の運転手第1号の律子夫人が、本当にいろんな形で世話もしてくれましたね。

私が前田勇太郎さんのすぐ次の副手で、尾上と岡本愛次が私のすぐ後に来たんです。

木村 馬場さんは？

内海 馬場さんは、そのとき数学科の学生でした。経済学部を卒業してから理学部の数学科へ行って、数学終わってから研究室へ戻ってきました。それでその2人が来て、それから岡部（利良）さんが来たんです。岡部さんの後に有田正三という順序だったと思います。

大屋 そういえば、たしかこの1年後になっっていますね。会計と統計が。

内海 有田正三の次が上杉。上杉の次が大橋だった。年からいうと、上杉と大橋と私と、あなた（木村）も一緒だろう。みんな一緒ですわ。みんな途中でちょっと寄り道したりなんかしている。上杉は東大の3年のときかなんかに本富士署に引っ張られて上杉慎吉がまだ東大の現役の先生ですから、それのせがれが留置場に入っていたんじゃないですか。それで結局、本富士署の留置場から退学願を出して、東大をやめたんです。そのときの上杉

の仲間が伊藤律ですよ。あれは上杉の一高の同級生ですから。

佐藤 フラスケンパーの指数理論を書かれたのは満州に行かれてからですか。

内海 いえ、あれは12年の末か13年の初めに出したんですよ。しかし、ハーバーラーなんていうのは大体オーストリー学派でしょう。だからいま考えてみると当時の私にはハーバーラーの議論は何にもわからなかつたんです。もともと、あのときにウエーバーとかカウフマンにたどりついたのですが。

大屋 それが先生の最初の論文になりますか。

内海 はい。学術論文としては。それ以外に前にいろんな。たとえば甘粕()石介の「ヘーゲル哲学への道」だとか、高沖陽造の「ニーチェと現代精神」とか、そういうものについて同人雑誌へ書いていますがね。

それから、ずっとそのとき新聞記者してまして、大学の最後の1年と満州へ行くまで、3年半新聞社の原稿書きで食べていたんです。

佐藤 それは何をやっておられたんですか。

内海 いまの京都新聞のもとになった「京都日出新聞」が、染物、織物の日刊の業界紙を出していた。その新聞は業界紙だから社説がないんです。社説の欄のところに400字詰めの原稿用紙2枚半の長さの「景気予測」という題の欄があるんです。それが私の担当した欄です。だから、2枚半の原稿を1000回書いたわけですよ。

木村 あれは蜷川さんの関原で書いたんですか。

内海 いや違う。あれは私が食べないというんで、いま函家になつてゐる堀内義夫が探してきてくれたんです。

ろまでには、1週間分みんな書けちゃう、初めはカレントトピックス、今週の話題で、あとはいつのせても差し支えないというのを書いておくんです。それを一遍に持っていていっちゃうとまづいだから、新聞社へ持っていくのは毎日毎日持っていくわけですね。御所の中を横切って歩いていくわけですね。

成績もそんなによくないし、そのときでも、まだ政治運動に心引かれていまして、学者になんかなる気は毛頭ないんで、世の中が変わってきたら、また飛び出そう、せめて労働学校でもやりたいなと思っていました。

大屋 そのころ盛んに労働学校がはやっていますね。高野岩三郎さんなんかも関係していましたね。

内海 そんなのやろうと思って考えたんですけれども、そういう形勢がないんで。その時期にわれわれの仲間の浪江虔が農村図書館始めたんですよ。それはいまだに貫いているから偉いもんですね。とても私などにはマネでできることではありません。ああいうアイデアが浮かばなかったんで、私は結局大学の中でひっそりと暮らしていました。

お行儀もさることながら、蜷川からすっかり閉門仰せつけられちゃっていますで、だれとつき合っているかというのをみんな指定されるんですよ。あいつとつき合っちゃいけない、こいつとつき合っちゃいけないって。(笑)あれとはつき合えとか。

内海 あんた、古谷綱正たちがやっていたエランビタルみたいなのと関係なかったか。

木村 直接的には関係なかったけれども。

内海 それで、右翼の石川興二先生のところへ行ってい

大屋 それは経済論説みたいな形のものでしょうか。

内海 そうです。それで何を書いてもいいんですね。初めはつらくて、1日のたったこればかりのこと書くのに4〜5時間ぐらいかかるんです。ダメなんだ。読んでもろっともおもしろくない。かた苦しいものしか書けないわけ。

大屋 経済解説よりは、むしろ先生の主張の入った論説ですか。

内海 いやいや、そのちょうど中間でして、それは主張いらないですよ。たとえばオリンピックがあると、それでもって景気がどうなるだろうとか。時評です。私の部屋にノ部ボロボロになつて残っています。いま読んでみても、何書いてあるんだかわかりません。ちょうどその時期が、支那半島へ滑り込むときなんですね。

大屋 それあつめて地かいたら、それなりにまた面白いものでしょうね。新聞社の方にはないですかね。

内海 京都新聞というのは、そういうことについては実に雑ですからね。総合資料館にちゃんと製本されて幾つかありました。それをとってきتانです。

それで、みんなに書いて書いて書きまくって修業しろよといっているんです。初めは、2枚半書くのに3時間も4時間もかかるんですよ。それが1年たちましたら、1週間分を1日で書けるんですよ。土曜日に京大の資料室へ行って「東洋経済」と「エコノミスト」と「ダイヤモンド」とみんな借りてくるわけですよ。新聞を幾つかとつていまして、朝、寢床の中で種になりそうなところを叩つけておくんです。そして土曜日の夜の8時ごろ、夕飯を食ってから書き始めるんです。そうすると2時ご

た。石川先生のところと、谷口先生のところと、それから八木先生のところと、蜷川以外にそこへ行くんですね。だけど、やっぱり蜷川のところで一等学生が大事にされたんじゃないですか。特に興さんにみんな世話になって先生の家へ行って飯ばかり食っていましたですよ。

ハーバーラーを読み終わって、何だかわけのわからぬ論文書いたんです。あの論文は、いまでも見る気がしないですよ。つまり、オーストリー学派に対する素養が全然なしにやっているわけでしょう。いまになって書き直したいぐらいですよ。

大屋 その後、大学院の学生をお育てになるときに、同じように、おまえこの本読め、これ以外は読んじやいかぬと指導なさったんでしょうか。

内海 いや、私には一等極端に当たったわけですね。ほかの人はみんな、私みたいなにむちゃくちゃではなくておとなしいですから。私はどこへ突っ走るかわからないというので、よけいコントロールされたんだと思います。だけど、大体本はみんな押しつけられて、「これ読め」ですよ。

木村 だから、ほくら学生の側から見ると、実際助手やなんかかわいそうだったですよ。誘惑すると、引っかかってくるのは内海さんぐらいで。(笑) ころら辺はまだフラフラしていたんです。天下国家をやりたいわけ。もうその前へ行くと、去勢されたようにおとなしい。それは一面からいうと、ほくらでもそうだったけれども、当時学生が羨なことやっちゃ困るという心配もあったと思うんです。

内海 集まって研究会やっちゃいけないんです。それで

こういうこというんです。図を書きまして、トツブに先生がいて、縦に連絡するのはいいが、横に連絡しないでくれ。いまそういうことをやっちゃいけない時期なんだというんだ。

大屋 先生、いつごろから、天下国家からだんだんと統計学に焦点がしぼられてきたんですか。

内海 いまでもしぼられていません。(笑)

大屋 ぼくはお話を伺ってしまして、ぼくの先生の高橋さんは、統計は仮の姿であるというふうに、すっかり割り切っておられるんですね。だから、統計学についてのお仕事というのは、最後まであまりなかったという形になりますね。先生の場合には、ずっとしぼられてきていらっしゃるような感じをお受けしていますが、それはいつごろからですか。建国大学へいらしてからですか。

内海 でしょうね。とにかく、関門塾居を仰せつけられて、何とかドイツ語が読めるようになった。そうしたらある日突然蜷川さんに呼ばれまして、「おまえ建国大学に行くか。この場で返答しろ」というんで、びっくりして私も建国大学は日本一のファツシヨ大学だって知っていましたから、「先生、どこかほかに行くところないんですか」といったら、「いや、行くか行かないか、この場で返答しろ」というわけですよ。行かないといえは、研究室から追い出されますから、「すみませんが、夜まで待ってください。東京の友達に相談するから、電話をかけさせてください」ということで、当時私らの相談相手というのは清和書店の清水正義ノ人だったんです。あとみんなつかまっちゃって、監獄が何かにおいでになる。あるいは連絡切れちゃっているわけですよ。それで、清和書

店の清水に電話かけた。何ていうかと思つたら、「もうオレたうにはおまえに食える職業を見つけてやる力もないんだ、蜷川が行けというところなら、どこでも目をつぶってとにかく行ってみろ」というんです。それで夜に蜷川さんのところへ行つて、「参ります」といいました。

蜷川さんは、その前にもうちゃんと作田莊一先生のところへ行つて、うちの副手の内海を採つてくれといったらしい。作田さんはまた作田さんで「いいよ」といって一度も私の身許を調べないで採った。あれ、調べられたう当然ダメなんです。

木村 いや、あのころは口ないよ。いい口ですよ。内海さんの建国大学については、先生もいろいろ考えた末、建国大学といった。

内海 その前に、満鉄に口があつたんです。満鉄に社内統計と社外統計があつて、企業の地盤になる社外の統計の主任が福田勇さんという人でこれほどこかの数学の先生をしていて、そつちに行つたんです。社内統計の主任が後藤憲章さんでした。

大屋 私ども知っている限りでは、後藤憲章さんは数学の本しか知りませんが。

内海 だけど、あの人は大豆の出回りの神様といわれていた。確率論でどうやったのか知りませんが、満鉄の経営の最大問題は、大豆の出回りでそれに対してここに何台、ここに何台と車を配置しなきゃいけない。それを後藤憲章さんは、この駅にはこのぐらい大豆が出回るということで、ずっとやっていた。

大屋 そうすると、後藤さんはもともとは数学出身じゃないんですか。

内海 数学出身です、それで、満鉄が経営している奉天の高等女学校の先生をしていうしたんです。後藤さんは一高で尾崎秀実と同級生なんです。尾崎がやってきて「何だ後藤、おまえは数学の先生していいじゃないか、調査部へ行けよ」というんで、尾崎秀実の口ききで調査部へ入ったのです。

それで尾崎とはしょっちゅう交流があつたんで、尾崎のところに何か秘抜いの書類を私信で書留で送った。何ということはない、大豆の出國りの数字なんですけれども、そんなものは調査部へ行けばその辺の机に幾らでもほうつてあるんで、ただ、どれにも「秘」という判が押してある。それを尾崎の家へ送ったら、尾崎の家宛搜索されたう出てきた。後藤憲章さんがゾルゲ・尾崎事件でスパイに情報を提供したというのは、そのことなんです。それだけなんです。とにかく、朝から晩まで正規分布なんてことばかりいつている人でしょう。それがつかまっちゃったというんで、だから何もわからななんです。そのころは、尾崎秀実とそういう関係にあるということもわからな。一体いつどこでだれがやられるかわからないというんで、こわかったですよ。とにかく、後藤憲章さんがソ連のスパイだつていうんでね……。

大屋 昭和26年か27年ごろですね。私、あそこの統計局に配りましたが、後藤さんにお会いしたんです。これがぼくの講義録だよといって、プリントの何かもらつたんですよ。見たら数字ばかりでしょう。このときから、「後藤さんは、あれでも戦時中はつかまっていたんだよ」といわれて、全然わからなかった。

内海 全然違うんです。本当に正規分布が好きなんです

よ
大屋 全くの偶然で、尾崎さんとのかかわりが理由だったんですね。

内海 だから、ゾルゲ事件についてはすごく好意的ですよ。大連の柳原やなんかやった清算運動なんかも、柳原たちが悪いんじゃないとはつきりいつたのは後藤さんだけです。考え方は非常に革新的な人ですよ。

後藤さんは、みんなに蛭川さんの本読めというんですね。なぜといったら、統計の本には定義がない、蛭川の本は全部定義してあるから、あれが一覧わかりやすいから、あれ読めというんですね。

とにかく福田さんが満鉄から内地留学で来たんですよ。昭和14年だったかな。

木村 12年から、満鉄は満州国の業務部門を基礎にして全面的に統計調査制度を企画するという仕事に取り組まざるを得なくなるんですよ。その段階まではやっぱり単なる業務統計だけで、いわば福田さんみたいな人だけで調査統計と同じだったんだけれども、あの段階から急に拡充しなきゃいけないということに対応して、福田さんは全面的に蛭川さんの指導をうけだした。統計調査係は全面的に蛭川さんの体系だったですよ。それは、間接的には満州国の統計機構にも影響しているだろうと思いますけれども、向こうへ行っても「統計学概論」ばかりです。

どんな人でも、「統計学概論」やれ、読めという形で読まされたもんですから、そういう面じゃ福田さんも前の方も、高岡さんとか---。

内海 その前が私なんだ。

大屋 先生、なぜ満鉄に行かないようになったんですか
 木村 いや、蛭川さんは、先生にしたかったんですよ。
 内海 それもあるんだけど、もう一つあるのは、と
 にかくだれか蛭川の研究室から満鉄の調査部へよこして
 くれということだった。安井謙とか手嶋は、その前に入
 っていたわけでしょう。あれはしかし、統計関係じゃない
 ですから。手嶋は情報班なんです。安井謙の方は経理
 係ですよ。

だれかというんで、一筆先に私が推薦された。あのと
 き学友会館で蛭川研究室だけでヒルファー・ディングの
 研究会かなんかがあつて、そのときに私が岡本愛次とけ
 んかしたりなんかしたのを福田さんが見ていたせいなん
 だろうけれども、内海じゃ、ちよつと満鉄は、ほかの係
 はいいけれども、統計係には激し過ぎるというんで、断
 られちゃった。そうしたら、それじゃといて、おとな
 しい高岡さんをやった。高岡さんは、金融論の小島昌太
 郎と蛭川のところで、半分半分かけていたんですよ。小
 島昌太郎のところでは、フーゲマンを訳したんです。こ
 れはまた極端におとなしい男で、私なんかと何でも正反
 対。高岡さんは、いわば私のかわりにあそこへ行って、
 その高岡さんが福田さんの後の社外統計の主任になった
 そのときに、殿村亦七——これは後でみんなとけんかし
 ちゃって別れちゃいまして、いま横浜にいますがそれか
 ら小島豊と、戦後中共に長くいた藤井権三、それから足
 立。

木村 藤井氏は統計課じゃなかったですよ。

内海 商業かなんかやっていた。それで、「満州評論」に
 よく書いていた。「満州評論」に書いてつかまらなかった

のは、彼ぐらいなものじゃないかな。

木村 統計調査係というのは、調査部の中でも独立していた。

内海 藤井という人は蜷川さんの弟子じゃないんで、あれは石川ゼミで、岸本英太郎なんかのグループです。岸本英太郎と藤井権三と雪山慶正、あのグループだった。それで、岸本が中心になって、あとが囃話で京都市役所の西陣の調査をやっていた。その調査がいけない、とかでみんなつかまった。—その後で権さんは蜷川のところへ来た。

木村 高岡先生が統計には入られたのは全く偶然だったのですか。

内海 偶然でもないでしょうけれどもね。

木村 いや、高岡さんは大学院で統計学を一度やっていた。ほくらあだ名をつけて、彼をマイヤーといったんです。そして有田氏をジーゼツクといていた。マイヤーとかジーゼツクスで、非常に同情的な意味を含めていったんですよ。そういう意味じゃ内海さんはハーバーラーとかいわれなかった？(笑)

内海 どうもダメなんです。統計学のプロパーにならない。

木村 よく考えてみると、それは大橋君にしても上杉君にしても、そういう意味じゃ、どっちかというところ、みんな統計学には取り込まれなかった方ですね。みんな枠外者ですよ。ほくら見て、大屋さんなんかもそうですね。それは一面、統計学のマイナスですけども、しかしやっぱりあまり統計学、統計学というのでやっていると視野が小さくなるな。その前の人々というのは、ある面

ではそういう犠牲者みたいな感じがしますね。というのは、もう現代的なこういう統計問題の重大時期に対応できないですよ。そういうと、ちよっと言い過ぎかも知れりませんけれどもね。

大屋 一面当たっているかもしれませんがね。

木村 だから、すぐ批判が出てきちゃうんです。(笑)

内海 私もやっぱり原点というのは、福本知夫なんですよ。というのは、中学校の2年のとき、社会科学研究会中学生連合会というのを組織したんですが、そのときに倉鉄道学校の争議がありまして、とにかく社会科学研究会の組織と中学生がつくった。それが昭和2年ですよ。まだ福本イズムが全盛のころです。27年テーゼが出てくる前ですから、そのときに方法論、方法論とやったわけですよ。中学2年が一生懸命読んだ本は「フォールバツハ論」ですよ。明大の社会科学研究会へ、中学生で半ズボンをはいて出て行って、そこで道瀬幸雄さんから、その「フイエルバツハ論」の講義を聞いて、福本の本、特に「社会の構成並に変革の過程」それから「経済学批判の方法論」とか読んで、その方法がいつでも頭の中にあるんですね。

その翌々年の夏なんか、一夏かけて一所懸命になって「唯物論と経験批判論」の研究を勉強した。そうすると蜷川が統計学は方法論というのと、こっちの方法とどうなんだろうというわけね。それで、蜷川の本幾回読んで、それが出てこない。それが、このごろようやく通路ができた。そうしたら、伊藤陽一という私の弟子が「内海の野郎、認識論主義だ」という。こっちは子供のときからの疑問を解いているんで、主義なんてもんいらないで

すよ。

木村 それは、ぼくらもある程度共通しているんですね
認識論から始まっている。関心があるんです。

内海 それで、ヘーゲルとかそんなものばかり読んでい
た。だから、蜷川さんの本読んで、統計学に唯物論を導入
しようというんだなと一遍にわかったですよ。

大屋 ぼくは、大学院に残りましたとき、森二郎さんか
ら、森さん例によって酔っぱらって帰りまして、ぼくを
つかまえて、「おまえは高橋のところに行っているそうだ
けれども、何を勉強しているんだ」といわれたもんです
から「蜷川さんの『統計利用の基本問題』をやっています
す」といったら、「うん、あれはいい本じゃ。おまえあれ
の種本知っているか」とおっしゃったけれども、全然わ
からなかったですね。「いや、知りません」といったら、
「オレもよう知らぬが、蜷川はあれを書く前に、唯物論
と経験批判論」をずっと読んでおった。おそらくあれの
種本は『唯物論と経験批判論』だね」と酔っぱらってい
わねまして、それからこれは大変だというんで、『唯物
論と経験批判論』を、また統計学に関連するということ
で読み直してみたわけですよ。そうしたら、初めてわか
ったような感じがしましたね。

その上、ちやうど学生時代に、九大にも社研と唯研と
いうのがありまして、その後大学紛争で大学やめられた
んですけれども、滝沢克己という哲学者の方から、ヘー
ゲルの『精神現象論』を読んでもらっていて、その後、そ
の先生の講読で『唯物論と経験批判論』を研究会で読ん
でもらっていました。そのときは全然結びつかなかった
んです。それで、森先生からそういわれて読み直してみ

て、なるほどなということだもんですから、やっぱり先生は、それよりもっと早くお読みになっていてパツとわかったというのは、大したものですね。

木村 内海さんが早くからいつているように、蜷川にはブハーリンの影響が強いでしょうね。結局ブハーリンはぼくの卒業のとき先生からもらったですよ。内海さんなんかは早熟の方だから、先に進んじやっていましたけれどもね。とにかく、学者は一応ブハーリンだろうな。まづ一番わかりいいというのは。

内海 とにかく、蜷川さんの場合の『ブハーリン』はボエーム・バグエルク批判、『金利生活者の経済学』をとっても高く評価していました。死ぬ直前にも、またあの本のことを話していた。よっぽどあれは感動した本なんですよ。

佐藤 ドイツに行かれているときにも、『唯物論と経験批判論』を少し読んでおられた。有沢さんが帰って統計学をやらなくちゃいけないんで、蜷川さんのところへ行つて相談したら、彼はちょうどあれを読んでいた。

内海 いや、だけど『唯物論と経験批判論』を読んだのは日本でだと思えます。蜷川さんが洋行したのは3・15の前の日だから、1928年の3月14日に神戸から出ている。そういうことで、私は排斥されちゃって満鉄に行かなかったけれども、そのうちに満鉄で主流派と福田さんの意見が合わなくなっちゃったんですよ。福田さんは統計中心みたいな組織を調査部につくるべきだというような意見書を書いて、それがいれられないんで、福田さんは満鉄をやめたんですよ。やめたのが、昭和16年の末か17年ですよ。それで、満州国の数学の教科書編纂官になって新

京（今の長春）に来たんです。

大屋 先生、さっきかう福田さんという名前が出てまいりますけれども、福田さんという方はそもそもどういうお方なんですか。

内海 これも数学の先生かう満鉄に入った人です。それで、満州国に移ってから私の家の近所に住むことになって、その福田さんから、内海さん、もう少し数学勉強しなさい、私が教えてやるからといわれまして、1週間に1度ぐらいですかね、亀田豊治郎の『確率論とその応用』をやりましたが、数学ってああやって勉強するのかとびっくりしたんです。本をこんなに積み上げて、要するにイコールが証明されれば、それで満足しちゃうんです。これはこのところのここへ出ていますと、いろんなところをとるんですよ。この本の何ページにそれが出ています、これをやるにはこのスターリングの公式が要る。スターリングの公式はここに出ていますというんだね。丁寧に、大体夜の12時ぐらいまで教えてくれるんですよ。数学なるものをまともにやったことない。一等弱い、自分がやってないところを福田さんに教えてもうった。本当にありがたかったですよ。それでなかったら数理統計について大きな口きけなかったらうと思うんですよ。

大屋 先生、建国大学ではどういう講義をなさっていたんですか。

内海 私は初め研究助手で行ったんです。行ってみたら荒野に小学校みたいな建物が建っているんですね。教室が1つあるだけで、研究室なんかありません。金禁制ですかう禁はあるんですよ。それで結局、矢張に引っぱられるまで研究室というものは持ったことがなかった。

大屋 大学の体面をなしていきなかつたわけですか。

内海 ええ、まあそういうふうでしょうね。だけどちゃんとして学部できていました。

木村 助教授もやっただけでしょう。

内海 助教授ですよ。だから、私は建国大学ではとても偉かったんですよ。

建国大学は、作田さんと石原莞爾が相談をして、その下が片倉表と根本龍太郎とか、ああいう連中がつくったんですね。要するに、関東軍の当時の第三課、第四課のさし金でつくったんですがね。そこへ行きましたら、助手豈なんかもちろんないですから、内海君、そこへオカシとノ人ですわつていてもしようがないし、君の講義は後期だから三年過ぎでないかないよというわけね(笑) いま忙しいから、教務料手振つてくれというんですよ。それで教務料へすわつたら、研究助手のはずが教務科教材係長になっちゃったんですよ。(笑)

それで、助手というのはいるんだけど、あとはみんな本当の事務系の人なんです。私だけが夜の事務員なんで、教材係というふうですわつていらっしゃるんですよ。教材係長なんです。私の隣に憲兵大尉の野田さんがすわつていらっしゃるんです。野田さんといって、これが憲兵隊のフランクシヨンだということが後でわかったんですけれども石原莞爾追放の原因になった建大における石原の講演というのは、私と野田さんがつくったノートなんですよ。

ほかに何もありません。それが、石原の思想がいけないというんで、東条にやられる原因になった。それからいま北海道の沖縄遺族会の副会長をしている佐藤さんがその隣にすわつていた。私の下にタリピストがいるんで

す。というのは、建大は五族すべての人間を集めていたわけ、その割合をよく覚えていませんが、日本人が半分であと朝鮮、台湾、蒙古、漢民族、日系露人というわけ、それはみんな各果知事程度の者で推薦者を試験して採るというシステムになっていゐるんです。

何しろみんな日本語で講義してゐますから、講義の全体を日本語でプリントしなきゃならない。そうでなきゃ日系露人というのは日本語が全然できないんです。いまはモスクワ大学の日本語科の教授なんかになつてゐるツウイロフなんというのは、私が代講で行つて教えて、「12いっすんぼうし」というのを教えたもんですよ。(笑)

木村 統計学を教えていたんですか。

内海 それからですよ。(笑)

それ以後大変なもんですよ、建国大学の連中の現在の中国の大学で占めてゐる割合というのは。特に現在の中国の東北地方の大学は、どこへ行つたつて建国大学の卒業生がずうつと並んでゐるんです。というのは中学出てから6年制の学校は中国にはないんですよ。いま上の連中は62-63才まで行つてゐるんじゃないかな。

この間マエラの統計協会の会議で、是永君が中国代表と話したら、鉄先生という向こうの代表が元建国大学の学生だった。大変日本語うまかつたそうですよ。是永さんが中国語ペラペラだということも、三猪君はあゝのとき初めて気がついたんだ。是永君は青島の中学ですから。

とにかく、統計学の講義が当分ないんで、初めは教務課教材係長になつた。そうしたら、図書課に資料室をつくるというので、おまえはもう教材の方はいいかう、図書課の資料室の主任になれということ、今度は図書課

です。資料室で何をやるかといったら、エッあるんだ。ロシア語のできる助手がス〜ヲ人いて、私はその翻訳班の親方なんです。それからもうノッは、ただで資料をもろうことなんです。いまと違ひまして、大蔵省とか商工省とかああいうところに、はがきノ枚で「この資料ください」というと、みんなくれるんですよ。私の在任中、何しろただで4000冊〜5000冊集めたんですよ。寄贈してくれ、寄贈してくれとやって、ただでもらった本の数が4000冊。そのときに、有名な建大の神田買い占め事件というのがあって、何井さんという図書館長の先生が神田の本を空にして本を買ったんです。新聞にでかでか出ていましたけれども、そういうようなことで、そっちの方を当分やっていました。図書館全体で15万冊の本を揃えました。

ノ年半ぐらいたつて、とにかく助教授になつたけれども、私は大変事務に有能な男だつて評判が立つちやいました。それはどうしてかという、事務の連中が、自分らの仲間が教師になつたという意識なんですよ。ユンバやると、私は事務の方にいるわけね。私が行くと、内海さんに頼まれちゃしょうがないとやって、ごろつきの大将みたいな人が何かやってくれる。ほかの人だと何もしない。あなた方そういう光景知らないけれども、事務員だけ集まると、教師が憎くて憎くてしょうがい「教師なんというものは、白墨ノ本渡して黒板の前へ立たせておけばいい、あんなやつ世話してやる必要はないんだ」というのが皆さんのご意見ですね。私が頼むと、内海は仲間だからと、いろんなことをやってくれるんですよ。それで教官連中が私に頼む、私を使うわけです。だから

教師と事務の間の折衝係だった。

そうしているうちに、今度は研究所ができたんです。研究所ができたう、そこで今度は研究所総務課付助教授というんですね。何だといったら、結局事実上の総務課長ですよ。自分の下に、研究所の庶務と会計がいるんです。そういうことをやっていたんです。

満州に出発する前日に私は蜷川にいわれたんですけれども、おまえこれから行くところは、右見ても左見ても関東軍の憲兵隊だと思え、講義をするときは、学生の中に憲兵がいると思って講義するんだぞというわけですよ。この講義はむずかしかったですね。とにかく大量を一所懸命唱えなければならないけれども、大量が何かと説明しなわけね。そういう状況で、とにかく学生と接触しなかった。いまでは、学生に付き添って福岡まで行きますけれども。(笑)あのときは遂で、学生は近づけないんです。結局6年間建国大学にいた中で、家に上げた学生は2人きりですよ。それで、何とかゼミを持たなきゃいけない。そうしたらうようどいい話がありまして、いまの統計基準部ですね。満州国総理府統計及統計科というところから、おまえ事務官兼任してくれないかといってきたんです。それを兼任したので、ゼミナールやうな清んだのです。

私の講義を最初に聞いたのは、いまは比較経営史をやっている、東大教授の中川敬一郎、あれが私の講義を一等最初に聞いた男ですよ。これからジャスコの副社長な人かもそうですね。学界じゃ中川敬一郎がノ期ですね。建大出身です。だから、あれやっばり保守反動だと思っています。

木村 でも、満鉄の子弟は、別に思想があって行ったと

いうわけじゃないでしょう。
 内海 だけれども、朝から晩まで国家国家と論じていた。
 それで満州国政府の方へ行きました。行ったら、その
 ときの満州国統計部の統計科長というのが尹明善という
 朝鮮の王族出身の朝鮮人で、これがまた大変な男で、満
 州国の日系の高官との社交だけで生きていて、統計のト
 の字にも興味のない男です。(尹明善は戦後、ソウルで暴
 力団のヒストルの打っ合いにはさまれて、双方から打た
 れて死んだそうです)とにかく、統計部長だけが中国人
 の満系なんです。きのう三国さんに電話をかけて聞いた
 んですが、徐という名前が、明治大学を出ていたことは
 わかっているんですが、満州国の高官でした。だけど、
 満系の人というのは用がない。朝やってきて、机に何か
 って、「文芸春秋」が何か読んでいるわけですね。資源
 課長だけが日系なんで、資源課長が一切の仕事をやる。
 私はその統計科の日系事務官で、私の隣にすわっていた
 のが小説家の吉丁(徐長吉)ですよ。バイコフと一緒に
 大東亜文学者会議満州代表でその吉丁が出ます。こ
 れが北京大学の日本文学科を出ていました。
 統計講習会というのがあって、その講習をやるのが
 私の1つの仕事だったんですが、そのときの統計学の総
 論のテキストは、蜷川の本を吉丁が書き直したものです
 よ。蜷川統計学の満州国への影響といえるでしょう。
 それともう一つ、北京大学の助教授で、蜷川の部屋に
 留学してきた劉興萬という男がいたんですよ。それが中
 国語で統計学の本を出したんだけど、蜷川さんに見
 せないんです。なぜ見せないかという。先生の本を写

して出したんだから、おかしくて見せられないというんだ。その男がベルリンで森田優三さんに合って、森田優三と連名で蜷川のところへ手紙よこしたんですね。その後どうなったか、劉の消息はわかりません。古丁の方は戦後に奉天、瀋陽でまたお芝居の世界へ帰っていったんですが、4人組にでもやられて殺されちゃったんじゃないか。正月に問い合わせ出すつもりです。というのは、福岡に有名な女流小説家がいる、その人がこの間満州へ行っって昔の小説家仲間会ってきたというんで、古丁がどうしているか聞いてみようと思っています。古丁はまるで日本人みたいな男で、しょっちゅう憲兵が家に来ていました。それで、鹿地亘の訳した『大雷迅全集』なんかを置いてあって、「内海さん、本は大抵焼いたけれどもこれもそのうらに焼かなくちゃならないでしょうとかいって、二人で一緒に酒ばかり飲んでいました。それと私とが統計科の事務官でした（最近古丁の妹から手紙もらいました、それによると反右派斗争のときに右派のレソテルをばうれて、迫害され、不遇のうちに死んだが、今では名誉回復されているとのことです）

私の担当は「統計年鑑」なんです。「満州帝国統計年鑑」の第1回と第2回は私が編纂していました。第3回はないんです、それまでは満鉄の関係だけで、満州国としての統計書というのは、私が編纂したもの以外にありません。

大屋 その現物はどこにありますか。

内海 大蔵省に第1回があります。第2回はおそらく何こうにあると思う。だって、第2回は、軍の機密が入っているとかで、全部で150部しか刷うせないんですから

ね。第1回というのは、結局「日本統計年鑑」の数字をみんななくしらやって、そこへ何こうの数字を入れたもので、数字を入れたのはいいんだけれども、何こうに数字がないんですよ。

大屋 ないところはつくったわけじゃないんでしょう。内海 いや、つくらない。だから空欄ばかりの統計年鑑ですよ。2度目は空欄が大分減ったんです。年鑑やなんかの仕事を実際にやった男は石さんと劉さんという男で、これは推定ですが、そのグループが、実は中共に存ったからの戦後の初期に活躍した中国の統計機関の中心になったらしいのです。

柳猷珍（これは安藤次郎さんの訳があります）がたしかその統計処にいたはずですよ。というのは妙なことなんですけれども、北京から統計の雑誌は出ないんですよ。

『統計工作』という雑誌をご存じかもしれませんけれども、『統計工作』ははじめの頃長春から出ているんです。それはどういうことかということ、あそこには昔の統計処しかいないですから。つまり、中共は統計機関を持っていなかったんですよ。楊猷珍やなんかはソ連派ですから私らのいたときみんなロシア語の講習会に通っていました。そのうちから何人が引っぱ張られちゃったんですよ。

私の記憶では、「統計年鑑」ともう1冊、「満州帝国統計図表」というのを出しました。それは大豆專篇というのがあつたんですよ。それはいま平壤の社会科学研究所に在る黄道崙がつくったんです。それは全体は私の責任で出したんですよ。私の統計屋の業績はそのときだけです。あとは統計委員会事務局がありますけれどもね。

ところがいろんなことがありまして、そこへ風変わり

な資源課長がハルビンから転勤してきたんです。つまり統計双全体の実権を持つている課長なんですね。日本人で、大塚謙三郎という男で、これが佐藤大四郎を連れてきて、綏化県農事合作社をつくった男なんです。浙江省の財政科長をしていまして、もと東大の新人会のメンバーなんです。それが資源科長で来たわけなんです。大妻私と話が合っちゃいまして、その人が「大豆専篇」なんかをつくらせたし、第1回の「統計年鑑」は、たしかその大塚謙三郎のときにやったんです。

大屋 何か『人間の条件』の背景みたいな感じがしますね。

内海 そうなんです。綏化県農事合作社というのは、満鉄事件と同じ時期にやられたんですよ。「在満日系共産主義運動」という憲兵隊の書類の中に大塚謙三郎のことは何度も細かく出てきます。

要するに昭和16年の関東軍特別大演習が終わって、それからいよいよ大東亜戦争にかかるころですね。そこで満州の一番検閲があつたわけなんです。その一方は満鉄事件で、そのとき井筒さんという人が満鉄から派遣されて、本向で満州国の企画双へ来ていたんです。それが引っぱられちゃって、獄死しました。そのときのいきさつのことは、憲兵隊の本に出ています。私が知っているのは大上未広というのがその事件の中心人物で、それが作田荘一先生の弟子で山田盛太郎の弟子なんです。実におかしい。国家論にすると作田荘一、国家論の「自然法則と意志法則」で国家が意志法則をつくっているんだというふうな考え方で、自然の方はマルクスでやって、山田盛太郎。それが結局満鉄の左翼を率いていた。それが監獄

で発狂しうやいまして、「天照大神」と紙に書いて壁に張
つて、一所懸命拝んでいた。そのとき引っ張られた大上
は、京都の人文科学研究所の助教授ですよ。助教授で、
満鉄からこっちへ移ってきてすぐにつかまった。大上が
獄死する時のことは戦後の国会図書館の創業時代の立役
者の一人だった板吉勇の自伝『調査屋流転』にかなり詳
しく出ています。

木村 一時講義していたんですよ。
内海 講義していた。建大でも講義していた。綏化果農
事合作社の中心人物は佐藤大四郎だったが、これは「満
州評論」から大塚譲三郎に抜かれて、綏化果に行った。
向こうの人民と結びついて農事合作社をこしらえたが、
それが根こそぎみんなつかまった。

この前、私は綏化組の会へ偶然招かれて行ったんです
けれども、バカみたいな話で、つかまえられて穴倉みた
いな留置場へ入れられた。そうしたらそこへ憲兵伍長だ
の軍曹が調べに来て、「私はどうも思想犯の方はさっぱり
暗いんですが、上司の命令であなた方を調べるんだけれ
ども、あなたに何を聞いた方がいいでしょうか」という
から、「冗談じゃない。審判者が取調べのやつに教えるな
んて、そんなバカなことはない」といったら、しばらく
考えて「あなたは階級を認めますか」といった。「認める
」といったら、「ああ、それじゃあなたやっぱり失産主義者
だ」と。 (笑)

綏化から新京へ護送されるときに、東京から来た思想
関係の検事が同じトラップにいた。そうしたら、どこか
で車がとまったので、みんなから離れたところで検事と
自分の二人で立小便をしたら、刑事が小さい声で「本当

にお気の毒と思いますが、時勢が時勢なので、どうも」といったっていう。つまり検事がう見ても犯罪にたらないんですね。「この者マルクスを読み……」というような調子なんですわ。だから、どうにもこうにもしようがない。でも無罪にできないんですね。憲兵隊の顔を立てなきゃならない。それはもう本当にむちゃくちゃです。佐藤大四郎は獄死したんですが、その辺のいきさつは憲兵隊の本のほかに『橋樑と佐藤大四郎』という本が出るんです。

井随さんが監獄に行っちゃった後に、満鉄から派遣されてきたのが小島豊なんです。彼は戦争が終わるまで満州国に派遣されていた満鉄調査部員なんです。小島が来て後、松岡靖雄さんがやうれちゃって、みんなつかまっちゃった。松岡さんは、一度矢隊へ行ってそれかう引っ張られたのかな。それで私と小島と二人で、どうしようか、みんないなくなっちゃっていったら、今度関東軍の仁科がやってきて……。

木村 森さんなんか、松岡さん知っていますか。

森 ええ、知っています。丸経綯の創設者ですわ。

木村 ぼくが矢隊に行つて、ちやうど経理学校にいたころ、経理学校へ見舞に来てくれたですよ。

大屋 松岡さんのお嬢ちゃんが東大の経済を出られた。大内さんのせんだいということ、あれは何回忌かやったときにお会いした。

木村 松岡氏は満鉄事件では引っかかってないですよ。

内海 引っかかっています。

木村 引っかかっているけれども、軍人で大したことをかっただけですよ。

内海 いや、そうだけれども、あれが大塚譲三郎の隣の
監房にいたんだよ。それで、大塚がこぼすこぼすって、
松岡が北海道へ来たそのとき、大塚譲三郎のこととあん
なにこぼしたやつはいないとかなんとかいつていた。そ
の大塚譲三郎が山田盛太郎を連れて、満州国じゆう歩い
たんです。大塚さんは大内ゼミです。

大塚譲三郎が引っ張られた後に来たのが、メーデー事
件で息子を警察に殺された近藤清成（この殺された息子
の名付け親が楊清宇を殺した岸野(?)）だったことは沢地久
枝の『もう一つの満州』に出ています。

これが満州建国組のロシア語系の親方です。何人かに
は非常にいい人で、日本へ帰ってからは鳥居製菓にいた
んじゃないかな。それはもう全然統計の人じゃないんで
すが、大塚譲三郎の方は調査に興味を持っていました。
徐処長さんなんというの、ただすわっていただけでし
た。何か発言したの聞いたことはない。満州国というの
はそうなんですよ。そういうこといっぱいある。徐さん
のあとに来た別の満系の処長の名はわすれました。

大屋 先生、復員されたのはいつですか。

内海 戦争の翌年、21年の11月14日に名古屋へ着いたん
です。

大屋 復員されてから早速京都へ行かれたのですか。

内海 家に帰らないですぐ蜷川のところへ行った。

大屋 そのとき蜷川先生は何とおっしゃいましたか

内海 蜷川は別に何ともいわなかったけれど、奥さんが
「うちの人が岡部か内海が帰ってきたら、と歌うように
いつていた」というんだね。そういうされると、「先生さよ

うなう」というわけにいかないですね。しょうがないか
う京都にとどまっただけです。

それかう食えなかった、食えなかった、大変でしたよ
文字どうり創えたんです。結局京都かう逃げ出して、逃
げ出したころには私のためのホストを木村さんが用意し
てくれていた国民経済は空家になっちゃって、小林義雄
さんと木村さんだけがいて、統計班の仕事なんてありや
しない。来て一応名前だけ、農林分室っていうんです。
そこへ来いというんだ。

私はもう学者やめようと思ひまして、昔とったまねづ
かで社会運動やううと思った。それで、そのときに一応
日農に復帰したんです。そうしたら黒田寿男と、その秘
書であつた藤田勇が、日本農民問題研究所というのをご
しうえりというので、部屋を1つ借りまして、そういう
看板を一応出したんです。そのときに東大を出てやっ
てきたのが、メーデー事件で「裁かるべきは裁判長である
」とか、とんでもない弁護をやった石島泰ですよ。あれ
が学校出て私のところにやってきました。

てんでお金の見通しがないんです。結局、「お金のこと
は心配するのいやだから、お金のことはオレに心配
させないでくれ」という約束で引き受けたんですけれ
ども、事實は、私が金を借りて石島さんたちの月給を払う
というようになっちゃった。それでいよいよ困つ
て、汚ないなりしてそこら辺ウロウロしていたら、木村
太郎が私を哀れに思ひまして、おまえの就職のことを相
談しようというんだ。あのときは、国民経済はどこにあ
ったのかな。

木村 あのかきは、農林省の中の農林部だっけ。

内海 いやそういやなくて、全体の本部の方。

木村 本部の方はお茶の水の「政経ビル」

内海 あれはお茶の水だったかな。お茶の水へ呼ばれて、そこには3人いた。倉持博さんと井上照丸さんともう1人いたんだ。それとあなたといて、いろいろ話したう、井上照丸が、「オレはこれから統計委員会事務局に入る、おまえもついてこないか」というので、井上照丸に連れられて統計委員会へいった。

彼が審査第2課長になって、私がその課長補佐みたいなところだった。そのときの統計委員会の顔ぶれというのが、委員長が大内矢衛、事務局長が美濃部亮吉、委員が有沢広巳、正木午冬、近藤康男、中山伊知郎というように連中で、要するに、その後みんな一役演じる連中です。

そういっちゃ悪いけれども、大内さんも美濃部さんも統計学なんというのはマイヤーが最後なんだな。それこそジージェックもフラスケンパーも知らない。これは正木さんがどこかに書いているが、統計委員会で、サンプリングのやり方も知らなかった。そのとき高橋正雄さんも委員で、彼はGHIQのリサーチ・ディビジョンの日本人側のキャップなんです。美濃部さんは要するにGHIQの御用承り係なんだ。GHIQからかえってくると「何々君、大変だよ」というのが口くせでした。そのころは、山中四郎が実質上の大将だね。あれは大蔵官僚でしょう

木村 もと満鉄ですよ。

内海 たって大蔵関係にいたんじゃない——企画院にいたんだ。あの人は8月の6日に広島にいたんですよ。ピカドンがやってきたときに、いすかはね上がってぶっ倒

れたとかいって、何か悪い顔しているんですが、実は原爆症だったんです。「それで私が行って半年たたないうちに、何かお腹のあたりにゆでかきかきで亡くなられたですよ。」

大屋 そのころ、高橋さんが「ポピュレーション」とか「ユニバーズ」という言葉が盛んに出てくるのをどう訳しているか全然わかってなかったといっていた。その後「デミング」が九月に来て講義してくれて、それを一緒に聞いたんですけれども、そのころ、やっとなあいうことをいっているらしいという訳語がそれなりにわかってきたとかいっていました。

内海 とにかく、サンプリングの初歩的なやり方を、みんな紙と鉛筆でアメリカ側から教わった。スイスに教わったんじゃないかな。向こうはまた、向こうのやつをそのまま押しつけてくるんですね。当事者が統計学を余り勉強していないから、昭和九年頃に蠅川がR・A・フイツシヤーの母集概念を批判していることを誰も知らない様子でした。

私が統計委員会事務局で最後にやらされた仕事は、25年の最初の国勢調査の職業分類なんですよ。そのときの相棒が森数樹で、森さんが産業分類をやり、私が職業分類だ。その途中で逃げちゃった。1週間には10回会議やる何やるかという、職業名を各役所で集めて、それを分類するんです。あらゆる職業を網羅しなきゃいけない。統計委員会の事務官にはこれが大問題です。

大屋 どこかに入れなきゃいかぬですかうね。そのころはサービス業という概念ありましたか。

内海 もうあったんじゃないでしょうか。サービス

業といつたかどうかは別だけれども。

25年の分類は、アメリカの戦時用の分類なんです。だから、一等上の分類が熟練、半熟練、不熟練です。それから今度、会社の社長とかなんかは熟練の中に入るといふ分け方で、これでやうなくちやいけないというので、ミス何とかというお婆あちゃんに高橋さんが議論をぶっかける。「おまえはその職業をどう規定するか」といったら、相手の答えは、「私はそんなフィロソフィーはわからない。だけどどんな職業でも持っていてみる、私は5分であちどころにそれを分類してみせる」といったんです。それとむりて高橋さんの書いたものが九大の雑誌に出ているでしょう。そのミス何とかとの話から、「産業・職業分類」が生まれたんですよ。

大屋 高橋先生の統計に関する唯一の論文ですね。

内海 職業をどう考えるかというフィロソフィーなんか知らないのが指導したんですからぬ。

あとは統計委員会の議事録の整理です。これをやっていて私思ったのは、委員会なんというのは本当に用のないもんだな、ない方がいいということだった。というのは、結局事務局の方は毎日毎日それを考えているわけですよ。向こうはせいぜい出てきたときに考えるだけですよ。だから、勝負にならないうんですよ。子供と横綱の試合みたいなもの、こつちがこう決めようと思ったう、何でもそう決まっちゃう。向こうが初めノーという、又番目は形を変えて出す。3度ぐういやったう、何でも事務局のいいなりだということがわかったです。だから、委員会で得意になって物をいつてるのはバカの骨頂です。大屋 専門的な見地から、これを論ずるのにはこれこれ

の資料が必要であるといったう、翌年度から委員を外されたというんです。だから、あまり専門的にやってもいけないし、あまり素人であってもいけない。事務局よりも玄人であってはなうぬという形になっていきますね。

内海 そういうことになるんです。

大屋 全部出された資料で、その限りで議論する。

内海 そのときは、まだNHKの運営委員の中に市川房枝が入っていたとか、ああいう時代でしょう。

私が統計委員会やめて間もなく、例の試験制度があった。あれノ固しか実施しなかったですが、課長に存するには課長試験を受けろというわけで、全部試験された。そのときに山川菊栄を落っことしたんですよ。蛭川はそれは受けなかったんです。そのときに統計職のノ番が森田優三、ス番が戸田敏忠、三番が小島豊だった。

それから間もなく大蔵省の統計課長のポストがあいたんです。その試験制度をそのままやれば、当然戸田敏忠がそこに行くべき順序なんです。そうしたら大蔵省の特権官僚（高文をパスした役人）がやってきて、戸田に、「あんた清くないけれども辞退してくれ、あそこは歴代特権官僚が行くことに決まっているところなんで、あなたなんかに来られちゃ困る」というので、戸田は大蔵省の統計課長になりそこなって、結局企画府の課長補佐かなんかでおしまいになったのかな。

その間にレッドページがあった。あのときわれわれの仲間じゃ上杉と本多秀男と、大分いたけれども、蛭川の関係ではそれだけでした。全農杯の委員長をしていた井上国雄もページを食いました。

大屋 先生、統計委員会には何年から何年ごろまで。

内海 まる1年。1年だけです。それで北大へ移るときに、人間の運命はこういうものかと思ったんですが、私その前に方々大学を探したんです。私は建国大学にいたというんで、あのときホワイトページがどこまで広がるかわからず、あいつ建大にいたから採ってやってもホワイトページを食うだろうということで、どこも採ってくれないんです。

1年たったら建大くらいじゃホワイトページ食わないということがわかって、一遍に5つだか6つの大学からいって来たんです。北大が一等先だったんです。これは岡部利良さんに話に来て、それが私になったんです。岡部さんはもう京大から動かないというんで-----。

大屋 その話を持ってこられたのはどなたですか。

内海 それは岡部さん。岡部さんが、自分が行かないかわりに行かないかというのでね。

佐藤 岡部先生は統計学で来られる予定だったんですか。

内海 いや、あのとき統計学とは限らなかったです。それで赴任しました。

木村 何年ですか。

内海 24年の6月かな。23年の春から井上照丸の下で働いていました。

大屋 たしかライスレポートの2回目の勧告の中には、旧帝国大学の経済学部には統計学の講座を必ず置けという勧告が入ってきますね。あれは直接は関係ないんですか。

内海 さあ、それは私にはわかりません。

いま覚えているのは、来ないかといったのは、私歌山

金沢、大阪市大、山口、東京工大なんだ。そのときは大橋がもう京都に行ったんで、大橋の後、私が東京工大の講師をしていたんです。

大屋 和歌山は、山本さんがいらしたんですか。

内海 ええ、私のかわりに行ったんです。それが、これまた国民経済研究協会でみんな集まったんですよ。

ついこの間までちゃんと講師はしていたし、和歌山県の中では革新派の有石を先生なんです。私の義理のおじに当たる見田石介のお通夜に行きましたら、山本の弟子だというのが見田のところにいるんですよ。山本ゼミナールじゃなくて山本ノミナールとかいって、ゼミの席に酒出すというような話をしたら、先生せんのこといって、山本さんはなかなか平和運動やなんかでいい役割りを果たしていたなんて弁護するんです。あれは岸本の仲間なんです。藤井の権さんとか岸本英太郎とすごく仲がいい。何か蜷川に恨みを持っているんですね。それは尾上さんが死んだときに追悼文の中で、蜷川が雪山を造り出したというときに恨みを込めて書いています。というのは、雪山は川端署につかまって、それも私に、おまえ、オレと一緒に仕事しろなんていって、私が断ったら、「この日和見主義者！」とかいって、私が三年のときでした。せんのことごとくってかう10日か2週間たったらつかまっちゃって、つかまったらすぐ転向しろやって、蜷川のゼミには内海だの中島弘爾だのという赤がいるから、オレはあのゼミやめろとあって、汐見さんのゼミに行ったのかを。そのときのことで、蜷川のことで雪山がよけいなことしゃべったというのは、それを何か山本が恨みがましく書いています。

そのとき彼、鉄道省にいた。レッドページをみごとに避けて「かわしたよ」って私にいった。だからどこかへボウとかわって、それかうページがあつたのに、彼はページにならなかつた。それで、蜷川のせきにいた長老で、和歌山に行った金持一郎さんが東京へやつてきて、上杉とあなたと山本と私と、あと4〜5人が国民経済の部屋で集まつた。そうしたら、「上杉さん、和歌山に来ませんか」ということだったが、「私はもう大阪市大に決まってる」とかあなたとかで、そうしたら、「そうですか、それじゃ内海さん来ませんか」というかう、「いや、私も話が決まってる北海道に行くことになってるよ」といったう、「ああ、そうですか」ということで、「山本君がいま失業みたいになってるかう、山本君行きなさい」「それはいいですよ」といつて行、たんです。

木村 そうだな。そういえばそうなんだ。国民経済時代ほくもよく会った。

内海 結局、国連の労働統計がケインズ理論に基づいてあるというんですね。なかなかおもしろいです。

大屋 そのときははアと思って、この人はどういう人なんだろうと思っていたんですけれどもね。

佐藤 船木さんの先生でしよう。

大屋 船木さんの先生だということの後で聞きました。

内海 どこで。

大屋 和歌山で

内海 森田さんが急に「内海君、君は何か北大に行くという話があるそうじゃないか」というんです。「北大に行つたって話し相手もないし、向こうは何かいつてきていますけれども、別に行く気ありませんよ」といつていった

う森田優三さんが急に恐しい顔して「君、いつまで役人
 しているつもりなんだ。私だって横浜に行ったとき話し
 相手なんか一人もいなかった。北海道へ行きたまえ！」
 というんだ。森田さんにどうなされたのは。後にも先にも
 あのときだけです。私はびっくりして、というのはい。そ
 のころ井上照丸さんのことがあった。それで、美濃部さ
 んが私を追い出したのかう、森田にそういうことをいわ
 せたんだと合点したわけですよ。それで家へ帰って、「れ
 愧へ行くよ」という手紙を書いた。

そうしたら、それからス〜う週間たろましたら、美濃
 部局長の部屋へ呼ばれて、そこに高橋正雄さんがいるん
 です。「おまえは北大から割愛交渉が来ているけれども、
 行くか」というかう、「ええ、まあ」といったら、「やめろ
 ！」というんです。私の推定全く間違っちゃった。「北大
 なんか行くことない、おまえもうしばらくここでしんぼ
 うしろ。あと長くて1年か1年半たったら、必ずアメリ
 カにやっつてやる。おまえもここでしんぼうしろ」という
 そのときにもし、おまえの統計学についてのいろいろを
 知識がここで役に立つんだかう、おまえ向こうをやめて
 くれといったら、きつと私「ええ」といったでしょう。
 だけど、人を利でつるんじゃないですよ。「私はアメリカ
 に行きたくありません。やっぱり北大に行かしてもらい
 ます」といったら、美濃部さん怒って、それから私の顔
 見るといやな顔するんです。

木村 どうもゆかうないな。それ逆だな。

内海 つまり、照丸さんとどけちやって、私を自分の子
 分にしたかったのかもしれません。

木村 それは、森田さんの勸告よかったな。

それが存じや動かなかったんだかうな。

内海 そうしたう、東京工大がまだ門戸があつたんです人間て、運が向いてくるときと運が向いてないときとある。あのときは、何しろ5つだからこの学校かう来いといううんだ。それこそよりどりみどりでですよ。こっちが探してりたときはないんだね。それはもう木村工んに助けてもらった。

木村 しかし、みんな統計基準局に長持ちしないよな。(笑) 何か陰うつな空気だったですかうね、あの委員会と事務局は。

内海 要するに内藤さんがつくり出したムードがね。

木村 どうしてあんな陰うつな力になったのか、それがぼくはよくわかうない。

大屋 内藤さんはどういう系列で入られたんですか。

内海 労働省の役人ですよ。それこそ高文とうそいかわりに役人になったんじゃないの。戦争中に労働行政をやつていて、労働統計からこっちへ来た。東大へ行くときの年がいい。「私は役人としてもう見込みがないから東大へ運動してそれが成功した。」

大屋 東大もどうしてああいう人物をやつたんですかね。

内海 それがやっぱり大内、有沢人事ですよ。統計学者じゃないでしょう。

大屋 「東大経済学部50年史」という厚い本がございますね。あそこに統計がどう書いてあるだろうかと思つて、定価800円の本、京都の古本屋で6500円で買いましたが高野君三郎が、そもそも講座の収録の中に全然出てこないですよ。東大に数理統計がどうやって入ったのか、どこからたれがやったのか、それがどう発展して現在そう

なっているかだけなんです。

内海 高野君三郎出てこないんですか。

大屋 出てこないですよ。

内海 それは一度たたくといいね。

大屋 といつても、お書きになつたのが宮沢先生だから無理ないだろうけれども。

内海 だから、こういう数理統計一週辺の人がいるというんで。(笑)

大屋 そのときはお願いしますよ。(笑) ただ、ぼくはこういう学部史の歴史、あるいは講座の歴史というのは、特に東大における統計学の講座というのは、日本で最初にした講座ですからね。しかも、経済学部を独立させるときの一番の長老でやられたのが高野先生で、やっぱりあらゆる意味で、日本の歴史の中で残る人ですからね。だけれども、講座の歴史の中には出てきませんね。だからあれ見ていると、数学者には歴史がないなということがよくわかるような気がしますね。

木村 森戸事件続きやうな書きや本当に「経済学部史」をいのですね。

内海 内藤さんというのはよほど私がきらいだつたらしいんです。

木村 あれはしかし大橋と仲がいいんでしょう。

内海 何か一緒に仕事していた。

佐藤 経統研にも入っていたわけでしょう。

内海 いや、入っていないよ。

木村 入ってすぐにやめたんですよ。

内海 そうか。何かそんなもの要うないということだ。

木村 何か報告出したことあるんですよ。

内海 後藤憲章さんが「統計年鑑」の編集を担当していたね。その辺はわかっているのかしら。戦後の初代の「統計年鑑」をつくったのは後藤憲章さんだということ。
大屋 「日本統計年鑑」がどういう形でできてきたかということについては、話は出てきませんね。

内海 私もそれは知らないです。そのときに、松浦はたしか統計局の養成所の所長をしていた。戦争中に松浦が新京へ行っていたのは何で行ったのかな。あのときから統計局かな。図書館のをやったのも後藤憲章さんだし、「統計年鑑」をやったのも後藤憲章さんです。ずいぶん活躍していますよ。

森 話は変わりますけれども、経統研をつくろうという話があったのはいつですか。

内海 あれは東京と関西と違うんですよ。初めは関西だけでやったんです。それが経統研の創世紀の最大のトラブルだったんですが、第2号に「東京だより」というのがある。

木村 そのときは、もう東京と一緒になったときじゃないですか。

内海 つまり関西に対して東京が「経統研の成立おめでとう」と書いてきた。そのときは大橋が京大へ上杉が大阪市大へ行って、足利が大橋のところの助手だったんです。

大屋 あれは何年ですか。25年か26年ですか。

佐藤 創刊号ですか。

木村 その前に研究会があったんですよ。東京でもあつ

たし、関西でもあった。そのことをいってあげられんのだと思うんだ、内海さんの関西が先だというのは。

内海 いや、第1号は関西だけなんだ。

佐藤 第1号は昭和30年ですね。

内海 足利が大体大橋のところでやっただ。それでさらに栗藤さんとか、もう1人栗藤さんのところの跡取りしている辻君を連れてきたわけです。

木村 その前に、関西に行って設立総会やっただでしょう27年かなんかに。

内海 だけど、第1号は関西が出したんですよ。あのとき上杉と大橋と、足利と有田もいた。それから馬場さんもいたんだ。大体あの連中が中心にやっていた。私は北海道ですかうね。それに対して東京側、具体的にいうと三浦君に広田さんが幾らか加わったらしい。

木村 そもそも経済統計の出版というのは、ぼくはそのころは忙しくて実際にはやることがなかったけれども、やっぱり標本調査論の批判以来のその当時の潮流に対する、何とか少し調整しなきゃいけないという役割の主張がかなりあったんですよ。丸山さんとか、労働省なんかにもあったし、正木さんとか統計委員会という人たちが東京でも集まって、統計理論の1つの刺激になったとぼくは思うんです、けれどもね。やはりそういう形で統計調査論をもう一度こゝできちっとしなきゃダメだということて-----。

内海 あれは、おそば屋でやっていたんだよ。

木村 政治経済研究所借りたことあったでしょう。

内海 私、それ出てない、あれは東京側の資料に出ていたろう。

木村 そこで月に1回集まろうということ集って、ぼくは出れなかったけれども、知ってる。また京都でもやっているうしいから、どうせやんなう連絡とってやろうということでは---。

内海 もうそのときには8000万人論文は出ていたんですよ。8000万人論文はやっぱ1つののうしだったんだよ。

木村 そのとき「第1号」が出て、これは非常にいいことだということで、金がないから何とかしろというのでぼくは統計協会にいたら、3号まで5冊ずつ買っていたんですよ。それで農林省で売ろうと思って行ったら、さっぱり売れなかったけれどもね。

内海 あれは売れないよ。(笑)

木村 ほとんど売れなかったけれども、財政的には助かった。

内海 「第1号」は、1人1000円ずつ出したんだよ。あのときの同人は全部で二十何人で、全部から1人1000円ずつ出す、それを資金にしろと私いったんだよ。それでやらなきゃこんなもの出せないって言って、何か二万幾ら集めたんだ。それで「第1号」印刷したんです。どうせまた赤字だから、ときどき金集めるぞといったんだよ。

木村 3号までは統計局で買っていたんです。

内海 4号から玄文社から離れたんだらう。

木村 そうそう、3号まではそんなに金がないということでもなかったですよ。

内海 それで、あなたの方も買ってくれなくなっただし、それから私が嵯峨先生に会って、「このままじゃつづけませんよ」といった。そうしたら嵯峨が、「よし、オレが半分出そう。残りの半分をおまえたちが都合しろ」といった

んだ。それでいいですねということだったので、そのま
まスツと100冊買ってくれたのかと思っただけ。その後
またつぶれそうになったんだね。あのとき何度か、少し
だけどお金出している。

どうせうちの雑誌なんというのは、和歌か俳句の雑誌
と同じで、書くやつが金出さなきゃもつわけないんだ。
そのときとにかく、寄贈をしないということ、交換を
しないということ、原稿料を絶対払わないということ、
あと金が足りなくなったら集めるぞということ、その4
つを出して、初めに1000円ずつ集めて、大橋さんのとこ
ろへ送った。そのときはまだ足利さんが事務やっていた。
それで3号でいなくなっちゃって4号から野村さんがや
ったんだよ。

木村 そのとき何部ぐらい刷ったんですかね。

内海 部数はわかんない。大橋に聞かなきゃ。とにかく
最初の同人は二十何人ですよ。30人はいなかった。だか
らいま10倍になっているわけで、大したもんだよ。だけ
ど、全然出てきたことない幽霊会員がずいぶんいるから
な。だけど、学会にしては出席率がとってもいい学会で
す。この間50%。一度京都でやったときなんか80%ぐら
い出たと思ったよ。

その前に、私が札幌で「唯物論」という雑誌を出した
んだ。いままた出しているけれども。そのときにそれを
考えて出したんですよ。同人が金を出し合う。そうすれ
ば出る。売れないというのは初めから決まっている。原
稿料出さない、寄贈しない~~~~って。けれども「統計学
」の方が楽だったな。蜷川は私にそういったんだけれど
も、100冊ずつ買い出したのは、1回、2回後なんだろ

内海 あの雑誌出したよといったう、本当にきげんはよかったね。

木村 ぼくも内部で話していて、経済的な問題かういえば蛭川さんももっと積極的に頼めばやってくれたと思いますよ。

結局、「統計学」には自立しようという意識がやっぱりあって、蛭川先生に頼むのはやめよう、東京では少なくともそういうふうにやっていたからうね。

大屋 あれは東京で、北川敏男さんが関係していると思うんだけど、昭和同人会から職業統計の批判みたいなやつが出ているのをご存じないですか。

内海 昭和同人会が出しているんですか。

大屋 昭和同人会名義になっています。それはまた別の流れなんですね。

木村 これは内海さんがいたせいかわからないけれども、標本調査の流れは、もちろん作物統計を基礎にして、農林省が一番先端切っていましたけれども、統計基準部の方は、内海君と仲が悪かったかわからないけれども、どちらかといえば、統計調査主義だったですね。

あまり標本調査論かうやっただのは少なかつたんじゃないですか。

内海 ほとんどいなかったんだよ。美濃部さんやなんかでも、第一わからないんだ。わからないといったらおかしいけれども、統計委員会のやり方というのは、何かいっても、標本抽出というところのやり方角いさうなんだね。それで、概念規定やなんかのところではいろいろいうんです。

私はこのごろになって気がついたんだけど、文内
美濃部的な統計の使い方というのは、数字を加工しな
いのね。そのまんまにして、それを妙に意義づけるから変
なことになっちゃうんで、関連する数字を持ってくるん
だけども、統計はあるままの数字を持ってくるんだ。
「800万人」の論文に、あの連中の人口問題の座談会が
あるよ。あのとき、私と小島がああ統計表つくうされた
わけだ。みんなで統計を、有沢さんやなんかが勝手にこ
というのね。それを見ていて思ったんだけど、いろ
んなことを引いたり足したり、指数こしうえたりとか、
そういうことないんで、こういうふうな意味じゃないと
か、こうなっているのはこれが原因じゃないかというの
で、範疇批判がないなということに気がついたね。それ
はもう、大内さんの財政学の本でもそうです。そのまま
の数字です。

木村 当時の占領軍の統計指導の方法というのは、明ら
かに天然資源局と経済局とが違うんですよ。当時は食糧
問題が一番基本でしょう。しかも、天然資源局というと
大体アメリカの農林省系統の人が指導者でしょう。戦前
の統計機構は、いわばローマにあった国際農業統計会議
にくっついていたんですよ。アメリカの指導者もややそ
ういう指導をして、作物統計機構を持ち込んできて、も
しろアメリカでもやれなかったような理想を作物統計の
中に持ってきたくらいですかうね。しかも体制内部から
いえば、昔からバイオメトリックスを中心にした高岡氏
とか、一儲にやりましたけれども、それがずっとバイオ
メトリックスでやってきて、そういう人たちからいえば
わが世が来たということにもなるわけですね。そのついで

でに、いままでの統計というのは農林省では片やみにいて、いわゆる農業統計は近藤さんになって初めて、農林省で若干やるようになったけれども、それまではほとんど農林統計が並行で戦後までずっと来るわけですかう。本当の意味での統計ノ本というのはほとんどなかったわけですよ。そういう意味で、いまこそ予算をとにかく取って、人員をふやして、統計機構をつくらうという意欲はものすごくあったんです。ですから、統計委員会といっても、近藤先生はおそらく統計委員会ではそればかり主張していると思うんです。

内海 そもそも、出てこない。

木村 大体おとほけんかして出てこないわけですよ。

内海 つまり、NRSを代表する力と、リサーチ・ディビジョンを代表する力の両方がのつているわけですね。

近藤さんと美濃部さんの二人でリサーチ・ディビジョンの何とかいう中佐がなんかを前に置いて、英語で討論したという有名な話があるんです。そのとき、統計委員会と農林省の間では横山さんが連絡係なんです。こっちは私なんだ。そうすると、親玉が英語でけんかしちゃっているんだから何もできやしない。

それで、方々へ行って近藤さんが講演するんだが、いままでの統計は化石化しているとかなんとかいうんだ。それがいろんな通信みたいなものに載ると、府県の統計課長連中がカンカンになって怒っちゃって、「近藤のやつ殺してやるよ」というようなこというわけだ。それで、これでゆすぶるんだ、ゆすぶるんだと一所懸命だった。だけど、農林省は一所懸命やっているわけでした。

木村 日本統計協会がキャンペーンできないうから、それ

についている統計調査部の1つのキャンペーン機関として農林統計協会をつくったんですよ。ですから、やっぱり農林省の方からは、1つは近藤さんがやってる段階から、統計委員会と決裂するような関係なんだ。そこは木村なんかはまだ統計委員会と通じるだろうということとで、秘書課長なんかは困って、それでぼくも秘書課長と一緒に、統計委員会の正木さんのところに乗り込んでいったことがありますよ。

統計委員会は、本来的に言えば、予算的にも調整しなまやなうない立場にいるわけです。こっちは作物統計をボンボン伸ばしていくわけですから、当然統計委員会からいえはらもしろくない。そこで、日本統計機構の分裂いけば中央集権的でない形が一番早くできるのは農林統計です。

内海 もう1つ前は厚生省だ。厚生省の人口動態統計……。しかし、大騒ぎになったのは農林省だ。統計委員会の目の上のたんこぶだといわれるのが農林省。

大屋 そうすると、総理府統計局の方に日本統計協会は事務所を持っていて、雑誌「統計」を出していましたが農林統計協会側は、農林省の統計調査部がバックアップでやるわけですね。

木村 あれに対抗し得るという形ですね。

大屋 しかしそれは考えてみますと、農林統計の方は、いまもそうだろうと思いますけれども、やはり社会統計的な発想が非常に強い。あの論文も幾つかそういうのがありますね。それと遂に、雑誌「統計」の方はどんどんと内閣総理府統計局の意向に沿ってやるわけですね。そういう傾向というのは、木村先生のパーソナリティーの

影響ですか。

木村 それと同様に、本来の統計調査部にすつといた、いま来ている久我さんを頂点として、豊田君、新しく来るけれども喜多君、その中間にもつといますけれども、昔の農林統計をやってきたのがあるわけですね。そこにいきなり作物統計だけが入ってきて、作物統計はもともと昔は食糧庁の系統に属したものですよ。それに対して統計課かう農地というようなものと一併にしたわけでしょう。そのいきさつかういえば、やつぱりセンサスの重視ということがいえる。

大屋 津村さんなんというのは近藤さんの流れの中に入ってくるわけですか。

木村 そうです。

大屋 林業統計の甲斐原さんなんかもその流れですか。

木村 甲斐原氏はもともと林業の方かう行かれた方だけれども、それはその次の段階ですね。むしろそういう統計調査部のつくり方の問題と、もつと利用のキャンペーンとやうなきやいけないう形で、農林統計調査をあの雑誌を中心にして、利用キャンペーンをやろうという形になって、あそこではむしろ統計利用を中心にしていこうという形で、甲斐原氏とか曾我氏とかが調整課というところに集められてくるわけだね。

ただ、それまではやつぱり、農林省の統計調査部は、ちやうど農業会が解消しまして、農業会の調査スタッフだった栗原君だとか戸田君だとか副島君だとか、かなりの調査ベテランが来た。率直にいつてわれわれが話しやすい連中ばかりが集まってやっているもんですから、かなりそういった統計のあり方について関心があったけれ

ども、その連中を集めたって、統計にどうという積極的な意見が別に出るわけじゃない。しかしこれをやっていた田中君とかは、とにかくそれなりの熱意を持っていた。非常にまじめな人で、それが統計調査部に引き返すのは、その前に、大蔵省がサンプル調査で金融機関調査やるんです。これは増山さんがたしか指導したと思います。

内海 北川さんじゃないかな。

木村 北川さんですかね。それが失敗に終わるんですよ。

大屋 石田君なんかはそれにかんていするでしょう。

木村 その後で、今度は農業センサスもサンプルでやろうという考えが、これは日本のサンプル、センサスやなんかに出てくる。それはむしろ津村氏とか戸田氏が出てくる。

それはおもしろいんで、そのことについて、今度喜多君が若干触れていますけれども、ぼくも一度触れたことがあるんだ。それで、1920年臨時センサスは、結局サンプルでやって、しかもグラフ調査までやろうということ、ものすごく細かい-----。

内海 あなたがいつてるのは、センサスですか。

木村 「30年林業」というやつですよ。センサスがアメリカ式になったんだ。

これがまたしょうがないものができちゃったわけです。調査票は細かくて、どう統計やるのかわからない。1つ1つの個票を見れば調査票にまとまっているんです。これは予算のムダ遣いで、結局何も集計しないで、しまっちゃったんですよ。これは、農林省では極秘になっている。

そういう形でサンプル理論に対する1つの壁にぶつかって、それから統計調査への再検討ということ、やっぱりセンサスに基礎を置いてサンプルをやるんだという考えがかなり出てきた。そのころから豊田君やなんかカムバックしてくるわけですね。そういう過程はあまり知られていませんけれども、かなり内部では変わってきているんです。

佐藤 農林統計協会ができたのは何年ですか。

木村 24年だったと思いますがね。正規の設立は24年の6月だったと思うんです。ただぼくは、それから25年ぐういまで専務という名前で国民経済にいました。実質は設立をやっていたんですよ。ですから、やったところがもう利用のキャンペーンをしろといったって、そのころレッドバージが重なっちゃって、利用する統計自体が出てこないんですよ。だからこっちは、営業自体に行き詰まっちゃった。それで2次のレッドバージがあって、しかもこっちが一番頼りにしていた鈴木穂君だとかああいう優秀な連中がみんなやめさせられちゃったわけですよ。内海 穂さんのあのとき、2次のレッドバージで熊本へ追いやられた。

木村 いや、レッドバージにしない形で、あの人が中堅で、当時の統計調査部の一番信頼できる人だから。その当時の秘書課長は長田君で、その前はその人は統計調査部の初代の総務課長をやって、ぼくが引っぱり出した人なんです。これまた上杉君と一高同期なんですよ。その人たちがなんか頼まれて、秘書課長に引き取ってほし

いということにあって、井上さんに頼んで、あそこの広報課に一応入れてもらったんです。

内海 穂さんが授任んじゃないのは何年だったかな。

佐藤 農林統計協会の仕事はずっと、実質的には木村先生がほとんどやられたのでしうか。

木村 32年までね。黒戦苦闘で、あのころは実際の調査なんか何もできない。ただ、いろんな企画やなんかにつ張り出すから、いろんなことにクツクツしました。

代が非常に変わってきて、要するに、そのころの責任者が初めは近藤康男氏の統計局という形でやってきたけれども、いわゆる縮小して部になって、それから農林省の幹事の人が出てきて、その途端に統計調査論。それからもう一つは合理化の線がどんどん出てきて、食糧事情も27~28年から多少よくなっていくから、作物統計に対する意識もだんだん変わってきてるし、それでいろいろ新しい行き方を統計調査部にくっつけていかないと、統計調査部自体も守れないということ。いまの農業観測、いわゆる流通測定ですね。そういったことをやったり、それから経済調査を一つ、マーケティングなんというところを入れたらどうなんだというような意見があったりした。それは成り立たなかったんですがね。それから農業加工品までやらなければいかぬとか、流通統計に力を入れるとか、いろいろの問題がどんどん出てきた。農林省はいまも聞いてみると、その継続で、いわゆる合理化問題が出るたびに、それに対応するんで大変だということとは変わらないうけです。

ただ、その作物統計が入るときにも、やはりおもしろいので、確かにクロップ・レポーティング・システムをア

メリカが入れてきたわけですからけれども、内部ではかなり民主的な人が多くて、じゃソビエトはどうかという形で当時のネムチノフの考えを入れて、向こうの統計教程なんかを訳したりなんかして、そういう勉強も大分しました。その過程でソビエトでも農業統計自体が変わってくるんですね。標本調査が。ことにフルシチョフ批判で作物統計機構がなくなっていくわけですから、あの過程でソビエト統計理論というのは、これを農林統計協会としては出したらおかしくなんなんだけれども、内海さんやなんかむかんでいるから出したようなわけで、あれまた農業統計協会でちょっと評価し直して、ソビエト統計論争に関心を持つようになった。

内海 あれは最初にあった農林統計協会じゃないんだろう。

木村 初めから統計協会ですよ。勝手に名前つけたわけです。統計研究会じゃないですよ。

内海 2号出たの？

木村 1号の方は、要するに国民経済でやった産物調査会で仕上げたようなもので、何も実体ないわけですよ。

そういう名前くっつけて出して、美濃部さんが2号を統計研究会に持って行って、そして続けて統計研究会の中で、今度は内海さんやなんかやったんでしょう。

内海 そうじゃない。1号からそうだ。

木村 そうかむかからないけれども。

内海 それで井上さんが訳して、私が一所懸命、その統計の術語はこうじゃないとか、ああじゃないとかいって、あれ2号とも私と照丸さんの合作、というより、照丸さんが訳したのを私が読んだ。1号の後に私の論文が

書いてありますよ。

木村 それはまだ統計研究会という名前になってない。

内海 最初のは統計研究会になってるんだよ。二号が農林統計協会。

佐藤 いや出版したところは農林統計協会ですけども統計研究会訳縮です。

木村 /号、二号、両方ともそうですか。

佐藤 ええ、そうです。

大屋 その統計研究会というのはどういうものですか。

内海 井上さんが美濃部に追われてそこへ行った。

木村 井上さんがあそこに行ったから、統計委員会になったんでしょうね。

内海 /号のときは、学術振興会からお金ももらったんだよ。それで、二号出そうとしたら削られちゃった。

大屋 農業統計研究部会じゃ、副会長は宇野弘蔵さんですわ。

内海 いまでもそうですよ。あそこは宇野さんの拠点です。

木村 しかし、あそこはわりといい仕事していますよ。

内海 初期には、私なんかと行ったんだ。吉植とか私とか、栗原、それから原田、斎藤晴造なんというのも行っているんです。

木村 あそこは何もお金があったからね。日本生命が出しているんでしょう。

内海 そう、いまでも日本生命の何階かを占領しているんだらう。いま統計研究会はだれがやっているんだらう

大屋 20周年号は、ここにありますがね。

内海 それまでは持っているんです。それ以後です。そ

のときまだ和泉がやっていた。和泉って満鉄の人です。

大屋 篠原さんがまだやっているでしょう。

木村 篠原氏がキヤップじゃないかな。

大屋 会長だったと思いますね。

内海 あそこは、実際は一橋の連中の東京でのたまり場なんですよ。もともと満鉄がつくって、一橋に取られちゃったんだという人もあります。山中さんとかがこれをつくった。

佐藤 木村先生は20年かう国学院へ行って、教えられることになるわけですね。そのいきさつはどうだったんですか。

木村 ですから、申し上げたように、農林統計協会で経営的にダメになったことと――。

内海 大事件があるんだよ。

木村 要するに、赤字がいつまでたってもあれしないうで、そのためです。赤字になるいろんな原因があったんですけれどもね。

内海 その裏を知らないもので、木村さんは大変悪くいわれる。彼が便い込んだんじゃないのにね。

木村 どっちみち、戦後は道楽というつもりでやっているから、経営からいえばいろんな人がいたわけですよ。上杉君もいたし、いろんな人が来ていた。しかも上杉君は、研究所でレッドページになったところを、表に隠していたから。

内海 何かすぐに刑事が来たそうじゃないか。

木村 ことにメーデー事件もなんかで。

内海 農林統計協会は8人やられている。一等多いんですよ。メーデー事件で被害に合ったのは。

木村 まあ、いろんな人が来ていたし。戦後の流れがそういうままでも続くはずはないんで、それが1つのわけれ目でもあるわけです。いろんなことがあったが、それはいえません。

内海 篠塚君もレッドパージ食ったんですね。あれは京都の農経だった。

木村 あのとときはレッドパージの人が大分こっちへ返ったんですよ。レッドパージのときに、結局組合の闘争をやめさせるにはお金が要るわけですよ。それがこっちも1文も力がないのに、秘書課長がこっちへ頼むわけですよ。あとで何とかするからといって、ぼくら統計協会にひそかに組合の委員長を呼んで、不談の話をした。向こうは向こうで知ってるやつばかりだからね。まあしょうがない、どっちに協力したかわからないけれども。(笑)

そういうようなこともありました。

内海 あなた日高の馬を見に来たのは、まだ国学院に入っていないときか。

木村 あれは国学院へ行く前です。農林統計協会をやめて……。

内海 やめて直後だよ、日高の馬を見に来たのは。

木村 よく覚えてるな。やめて、結局飯食わにやいかぬし、農林省で中央畜産会へ行って、ちょうど競馬馬の生産費調査をやるところから、それを君やってくれないか、じゃやりましょうということ、競馬馬の調査をやることになった。これはすごいんですよ。金が年に3000万円くらい出るんです。それで結局、調査は、ぼくともう1人、

野村という東大の馬の専門の先生、それから宮坂五郎と
いって、『畜産経済』という本を書いた人です

とにかく、馬の世界に入るには、馬がわからなきゃな
らない。こっちは馬は全然知らないでしょう。宮坂君は
昔から農業経営の専門家だし、う人組んでやったんです
けれども、結局金の大部分は、戦時中に軍馬生産に携わ
った獣医さんが当時みんな失業しているわけで、そうい
う獣医さんの生活基礎を獣医として残していこうという
形の補助金ですよ。ですから2000万円もらって、ほ
くらのやるのはそのうちの100万円もないくらいで、あ
とみんな補助金に流すわけですよ。大義名分上は生産費
調査です。

結局、そのころの場所は日高、馬産地の青森から秋田
山形、それから九州の大隅半島、全国的にやるわけですよ
「アラブ」と「アラブ」の両方やったわけですよけれども、結局仔
馬が非常に高い。生産者からいえば、馬主だけもうかっ
て、生産者はもうからないということ、実際は赤字経
営ですよ。それに生産者費みたいなのをつけてくれとか
改良の余地がある。そういう形で生産費をとらえていた
そのころ、北海道に行っちゃ内海さんにごやっかいにな
ったわけですよ。

しかし、やっっているうちにだんだん、馬を見るとサシ
わかるようになってきたね。(笑) 野村というのは、
馬見ると、歩かしてちょっと見るけれども、向こうから
いえばぼくが一番年取っているように見えるので、これ
が一番馬の先生だろうというわけだ。(笑) 村に入ると、
講演会やるわけですよ。(笑) ぼくがやると、ぼくはどっ
ちみち経済の話しかしないわけだけれども、向こうから

いえば馬の先生に違いない。そこで、うちの牧場の馬見
てくれというんだね。ぼくが見ると、市場に出すときと
にかく2〜3割上がるんですよ。(笑)途中で国学院に行
きましたか、それを何しろ頼まれて、6年間ぐういやり
しましたね。毎年夏休みに不ると、ことしは北の方とか――
――。

佐藤 それの報告書みたいなものはまとめたんですか
木村 ええ、毎月毎月、毎年毎年出した。これがまたぬ
もしろいんで、近藤先生が昭和16年ごろから、馬産大調
査をされておられるんです。これは有名な調査で、日本
の初めての馬の統計調査です。

そこで多分ご存じかと思うけれども、馬は半分ぐうい
が、生産者といっても下請制なんです。ですから牝馬を
払い下げて、それを下請して、売るときには売り上げだ
けを折半するというシステムなんです。ですから、生産
者はほとんど生産費をかぶっちゃっている。

ぼくらには、その下請制自体を問題にしたわけですよ。近
藤先生もそれをやはり問題にされていて、これは昔の封
建論争時代のあれで、封建的な分役の形態だという規定
をされているんですよけれどもね。ぼくは、それに対して
やっぱり下請制は下請制だというようなことをいって、
これは別に表立った論争にはならなかったけれども、日
高なんか、やっぱり近藤先生みたいに、封建的な小作関
係ということだったけれども、大規模農場ほど下請制が
大きいんですよ。中くういの生産者は、どちらかとい
うと自己保有馬を持っている。下請制はやっぱりめうれ
ない。そこでやっぱり近代的下請制だというようなこと
を、その中で主張したりなんかして、これは結構楽しい

った。

国学院に帰ってきて、統計学じゃなくて、農業政策やったんです。大体国学院に行ったのは、経済政策論とか産業論をやれということで行ったんです。

内海 あの時、あなたの姉さんかだれかが国学院の品俵方でいたろう。木村、武田、遠縁です。そのころ坂寄が来て、立命に來い、立命に來いということ、何やるのかといったら、経営学やれという。オレは経営学はとてムダメだといったら、いや君、経営失敗したやつがやうなまやメだと。(笑) いきなり、経営学部長やってくれというんだね。

内海 坂寄はあなたをえうく高く買っているんだ。

私、彼が労研をやめるとき相談に来たのを覚えているよ。

木村 国学院へは産業論で行ったんです。経済政策もやるつもりだったんですけれども、中川友長先生が統計学をずっとやっておられて、国学院は、ぼくが行ったころはみんな兼任教授制というのが認められていたんです。実際の専任の教授というのもしょいしましたけれども、主たる教授はみんな兼任で、中央大学とか、一橋とかかうみえていました。

ぼくは産業論もやったんだけど、中村金治氏が農業政策をやっていた。中村氏がやめたんで、農林統計協会なる農業できるだろうということで、農業政策をやった。それで40年になってから、経済学部をつくらなきゃいけないになった。そのころは、経済学部をつくれば、一応は済にしましやいけな。これは専任を置かにやいかぬということ、また統計学——これはぼくが設立者で

学部長だったからね。だからどうしても統計学をやると
いうことで、昭和40年から統計学の講座を持った。それ
からあゆんで論文を書き出したんだ。間に合わせばっか
り。だから、全然統計学やるつもりであそこに行ったわ
けじゃないんですけれども、その前かう、農林統計にい
た延長で、どうしても統計のものが多くなっていました。
内海 だから、高橋、有沢の世代よりは、われわれの方
が、統計に凝着しているんですね。高橋、有沢の連中は
統計なんか全く食うための手段というようなものですね。
木村 まあ、ぼくなんかもそうだよ。(笑) 学部のためだ
とってしまえばそれだけで。

内海 だけど、大橋なんかはやっぱり初めから好きだっ
たよ。あれは東大の仏教哲学の大学院にいたんですよ。
彼の卒業論文は仏教経済史なんです。蜷川の本を読んで
感激して、京都へやってきたんだね。そのとき、彼は東
京にいられない程度に追っかけ回されていたんで、あの
ときは医学部の関係の学生運動を彼が担当していたんで
す。それで東京にいられなくなっちゃったということも
あったんだけど、とにかく蜷川のところで勉強しま
うというんで、京都へやってきた。

あ、それ、1年のとき、大橋が背広で入ってきたよ。1
年はゼミサークルに入れないうって退場したのを覚えて
いる？

木村 蜷川に断わられた。うさんくさく見えたです。身
も食っていたし。それでも彼は統計学をやろうつもりで来
たという以外に考えようがないわけです。先生は初め、
あまり感激しなかったんです。先生からいえば、でき
るだけ傷のないのを欲しかったらうけど、結局、傷のあ

ものはほかに行きようがないわけですよ。そういつちや悪いけれども、やっぱりみんな、本当に蜷川さんのところへ行ってやろうということは裏やうなかつたですね。

佐藤 大橋先生は最初からマイヤーでしたか？

木村 そうですね。

内海 彼の最初の著書は、そこに出てきてないけれども『智山教学経済史』という本だよ。それは智積院の歴史ですよ。

木村 本当かどうか知りませんが、シヤハットの『ドイツ財政危機』を彼は訳しています。それは、東大の学生時代です。越智道順と一緒に。

佐藤 高木香玄先生なんかは、内海先生が京都におられるところですか。

内海 私がいなくなつてからだと思います。それで、あれは関大を出て関大にいたんだと思う。蜷川のところに入りまして指導は受けていた。

とにかく、われわれの前にあらわれなかつたよ。だから、大学院はこつちへ来なかつたんだと思う。

大屋 有田先生は、そのころからずっと、おまえジージエウヤレということだったのですか……？

木村 そうですね。それはやっぱり蜷川先生の指示で忠実に続けられていたんですね。

内海 あれは私と違って野心を持たないんだね。野心と云つたうぬかしいけれども、こつちは唯物弁証法というようなことをいうんだがあれはゲーゲツクとフラスケンパーに沈潜しちゃっている。それも、あの人の調査過程論ばかりなんだよ。たとえば、ジーゼックの平均論は扱わないし、フラスケンパーの平均論も扱わない。

木村 それはやっぱり、先生の学説を忠実に守ったんで、内海さんは守らなかった。(笑)

内海 それは私、守る気もないですよ。

木村 ゼミが終わった後、当時は上杉、大橋といった仲間、結局おでん屋かなんかへ行っ、天下国家を論じ話し合った。ゼミの流れじゃないと、なかなかそうはいかない。二人とも統計学をやるつもりですから議論する。ぼくはどっちかというところの気が一番ない方で、横から見ながら勝手を批評をしていた。

その議論には、やっぱり大分巻き込まれましたね。蜷川先生も、統計学やるんなら、社会集団論をやらないでグダメだということをしきりにいっていたから、それは、上杉、大橋なんかも頭にこびりついてるし、おそろく内海さんももちろんそうだろうと思うんです。というのは、ぼくはやっぱり、蜷川先生は統計対象論で迷っていたんじゃないかと思うんです。自分でああいうふうに分断切り切っちゃったけれども、根本的には、社会集団を彼なりに片づけるだけではいろんな矛盾が出てくるという点で、それをやれやれというふうにいわれたんじゃないかなうかと、ぼくは理解しているんです。

大屋 上杉さんは、先生たちが見ていうっしやって、そのころどうでしたか。やっぱり集団の方に動かれちゃったわけですか。

内海 それが造うんだな。

木村 そうですね。隙間があったんじゃないでしょう。彼にしても大橋にしても、仕方がないからやったというところじゃないかな。というのは、やっぱりそこまで入り込んでなかったんですよ。

内海 あれは大連の事業調査局で研究会やっているとい
うので、あのとき上杉が報告したのは、津田左右吉の『
支那思想と日本』だよ。(笑) オレ覚えていたんだ、妙な
ものやろと思って。表波新書にあったろう。あれの報告
していたよ。それからあともう一つ何だったかな。

木村 何か綏化県の調査をやった。この間行ったら、彼
原稿を見せてくれたよ。

内海 大連の工場地帯の。

木村 それとも一つ、あれは県の調査だったんです。

内海 とにかく彼は現場歩いて、貧民窟の中を歩いて、
満鉄の連中にそれといたら真っ背になって、出張旅費
に守るないものだから、大連を調べるなっていつていた
。(笑)

木村 でもやっぱり、彼は工業統計と、統計批判という
面が一番やったですね。大学時代からずっと工場統計を
やっていました。彼が通産省に行ったのは、一番近いと
ころへ行ったわけで、工場法の設立と工場統計の設立と
結びつけた。

内海 しかしあれは、人口論といつからやり出したのか
な。

木村 その辺はぼくわからないな。

内海 古いんだよ。シュトレームウイッチなんかをわれ
われの中で問題にした一等初めだからね。シュトレーム
ウイッチが出たのは1936~1937年だろう。ところが不
思議なことに、彼、論文がないんだ。

木村 学生時代は、ぼくも彼と一緒に『資本論』の研究
会やなんかやって、彼が一番リードしてくれた。大橋君
なんかとやったことあるけれども、そのころやっぱり、

『資本論』の翻訳には彼タッチしていますよ。

内海 彼が長谷部『資本論』の年表と索引がなんかまつくったんですよ。

木村 むしろ、そっちの方をかなり熱心にやっていたんですね。

内海 だから、彼が長谷部さんの遺産管理人ですよ。それで、いま『剰余価値学説史』が原稿のまんまで寝ているんです。いまに存ると出ないんだな。出そうというとき青木がウンといわないんだ。あれは1巻しか出てないんです。あと全部原稿ができていますよ。

何とかしなくちゃといっているんですけども、かれと浅野が結局遺産管理人ですよ。

大屋 メカの翻訳やり出しましたからね。

木村 『資本論』の方は、大連へ行ってほとんど切れちゃったでしょうね。

内海 彼が行っているうちにやられちゃったろう、長谷部さんたちは。

世界文化が弾圧食ったのは、私がまだ京都にいたときだったね。熊沢嘉八が清和書店と一緒にやってきて、世界文化の連中の家の方々歩きまわった。